

革命通信

第 11 号
77. 3. 1
定価 300円

共産主義者同盟
マルクス・レーニン主義派

わが戦闘旗の下に日本労働者階級人民は結集せよ 綱領草案を決定す

前文

全ての同志、読者諸君！

我々は、今こそ、我々の思想路線、政治路線の全てを明らかにしよう。日本三千万労働者階級人民の戦闘旗を高々と掲げることしよう。そうだ！我々は、遂に、組織としての『綱領草案』を克ちったのだ。

現在の日本社会主義運動の緊要な問題は、ばらばらな手工業的な地方主義的な活動を発展させることではもはやなく、団結させること、組織化すること、第三次ブンドに統合することである。わが『綱領草案』は、このような一歩を踏み出す絶対的な前提として必要であった。

我々は、当初、連赤総括を一方の柱とし、六つのスローガンを他方の柱として出発した。安保体制下の日本ブルジョア階級独裁との闘い、修正主義・社会帝国主義の「日共」、協会、革マルとの闘い、小ブルジョア急進民主主義の塩見一派との党派斗争、党内斗争の四重対峙戦にたえ、困難をのりこえ、闘い抜き、遂に、我々は組織としての『綱領草案』を獲得し、広範な持続的な活動のための堅固な土台を作り上げたのである。

高原同志の『綱領草案』を転機に党内論争が激化し、全面化する中で野心家、投機分子が正体をあらわし、論争を利用し、機関を私有化し、右日和見の路線をもちこみ、組織を混乱させ中央乗っ取りをたくらんだ。しかし、この陰謀は、論争を中央集権主義の確立、組織建設との連関で位置づけまいにいたるまで我々によって粉碎され、こまごまに打ち砕かれた。つまり、わが『綱領草案』は、我々一人一人の脳漿と血と汗の結晶であり、その全成果である。

わが『綱領草案』の特徴を一言でいえば、毛沢東思想を積極的に評価し、反スタ的一国社会主義論批判を止揚し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を日本階級斗争に正しく適用し、現代修正主義・社会帝国主義に抗し、革命戦争の暴力革命と日帝打倒プロ独・社会主義革命の観点をさわめて具体的に、さわめて明確に提起していることである。

全ての同志、読者諸君！わが『綱領草案』の下に結集せよ！

『綱領草案』

①我々は、現代修正主義に転落した「共産党」から決別し、トロツキズムの革共同に反対してきた共産主義者同盟（ブンド）の一分派である。我々は、日本プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党を創建し、アジアの社会主義国、民族解放斗争と結合して、日本革命、つまり、日米安保体制粉碎、日本帝国主義打倒、米帝国主義追放、プロレタリア階級独裁、社会主義革命を実行することを当面の目的とする。

第一章 資本主義と

プロレタリア共産主義革命

②プロレタリア階級の解放はプロレタリア階級自身の事業である。マルクス・レーニン主義党はプロレタリア階級の前衛であり、一般的には、暴力革命によってブルジョア階級独裁を打倒してプロレタリア階級独裁を樹立し、資本主義を廃止して社会主義を建設し、終局的には共産主義を実現することを目標とする。このプロレタリア共産主義革命は資本主義の発展と矛盾によって必然的にもたらされる。ロシア共産党の綱領はこのことを次のように正しく特徴づけているので、我々はそれを継承する。

③「このような社会の主要な特質をなすものは資本主義的生産様式にもとづく商品生産である。この生産関係のもとでは、商品の生産および流通の手段のもっとも重要な、いちじるしい部分が少数の間からなる階級に属しているのに、他方、住民の圧倒的多数はプロレタリアと半プロレタリアからなっており、彼らは、その経済状態にせまられて、常時あるいは定期的に自分の労働力を販売することによって生きていく。すなわち、資本家の雇い人となって自分の労働で社会の上層階級の所得をつくりだすことをよぎなくされている。

④技術の不断の改善が、大企業の経済的意義を増大させる一方、独立の小生産者を駆逐し、彼らの一部分をプロレタリアに転化し、残りの部分についてもその社会経済生活に占める役割を縮小し、そこで彼らを資本にたいする、多かれ少なかれ完全な、多かれ少なかれ明白な、多かれ少なかれ重圧的な従属におとし入れるにつれて、資本主義生産関係の支配分野はますます拡大する。

⑤この同じ技術上の進歩は、その上、商品の生産および流通の過程に婦人労働と児童労働をますます大規模に使用する可能性を企業家にあたえる。しかも他方では、それは労働者の生きた労働にたいする企業家の需要を相対的に減少させるので、労働力にたいする需要は必然的にその供給にたちおくれる。その結果、資本にたいする賃労働の従属が増大し、その搾取の度合いがたかまる。

⑥ブルジョア諸国の内部におけるこのような事態と世界市場におけるそれら諸国相互のたえず激化してゆく競争とは、たえず増大する数量で生産される商品の販売をますます困難にする。過剰生産は多かれ少なかれ鋭い生産恐慌となつて現われ、恐慌のあとには多かれ少なかれ長びく産業沈滞期が続くが、この過剰生産はブルジョア社会において生産力が発展していくことの不可避の結果である。

恐慌と産業沈滞期は、それはそれで、小生産者をさらに一層零落させ、資本にたいする賃労働の従属をさらに一層深め、労働者階級の状態の相対的悪化に、ときにはまたその絶対的悪化にも、一層急速に導いていく。

⑦こうして、労働生産性の増大と社会的富の増加とを意味する技術

の改善が、ブルジョア社会では、社会的不平等の増大、有産者と無産者との隔たりの拡大、勤労大衆のますます広範な層にとっての生活の不確かさと失業とさまざまな種類の困窮との増大の条件となる。

⑧しかし、ブルジョア社会に固有なこれらすべての矛盾が増大していくにつれて、現存の秩序にたいする勤労被搾取大衆の不満もまた増大し、プロレタリアの数と結束が増大し、自分たちの搾取者にたいする彼らの斗争が激しくなる。それと同時に、技術の改善は生産および流通の手段を集積させ、資本主義企業における労働過程を社会化することによって、資本主義的生産関係を共産主義的生産関係に代える物質的可能性はますます、プロレタリアートの階級運動の意識的表現者である国際共産党の全活動の終局目標である、あの社会革命の物質的可能性をますます急速につくりだしていく。

⑨プロレタリアートの社会革命は、生産および流通の手段の私的所有を社会的所有に代え、社会の全成員の福祉と全面的発展とを保障するために社会的生産過程の計画的組織化を実施することによって、諸階級への社会の分裂をなくし、こうして抑圧されている人類全体を解放するであろう。なぜなら、それは社会の一部分による他の部分の搾取のあらゆる形態をおわらせるであろうからである。

⑩この社会革命の不可欠の条件をなすものはプロレタリアートの独裁である。すなわち、プロレタリアートに搾取者のあらゆる反抗の鎮圧を可能にする政治権力を、プロレタリアートが闘いとることである。

⑪プロレタリアートにその偉大な歴史的使命をはたす能力を獲得させることを自己の任務とする国際共産党は、プロレタリアートをすべてのブルジョア政党に対する独自の政党に組織し、プロレタリアートの階級斗争のいっさいの現われを指導し、搾取者の利益と被搾取者の利益とが和解しえないように対立していることをプロレタリアートのまえに暴露し、きたるべき社会革命の歴史的意義と必要なる諸条件とを彼らにたいして明らかにする。

それと同時に、国際共産党は、その他の勤労被搾取大衆の全体にむかって、資本主義社会では彼らの地位は絶望的であり、彼ら自身を資本の圧制から解放するには社会革命が必要であることを明らかにする。労働者階級の党である共産党は、勤労被搾取住民のすべての層を、彼らがプロレタリアートの立場にうつってくるかぎり、自分の隊列に呼び入れる。

⑫共産主義の低い段階である社会主義は相当長期にわたる歴史段階であり、終始、階級、階級対立、階級斗争が存在し、プロレタリア階級とブルジョア階級の社会主義と資本主義の二つの道をめぐる斗争が存在し、資本主義の復活の危険性が存在する。だから、プロレタリア階級は社会主義の全歴史段階を通じてプロレタリア階級独裁を堅持し、社会革命を継続しなければならぬ。こうしてこそ、資本主義の復活を防ぎ、社会主義を強化することができ、最終的にブルジョア階級を消滅させ、階級、階級対立を消滅させ、共産主義の高い段階を実現できるのである。このプロレタリア階級独裁の下での継続革命の理論と実践は毛沢東思想によるマルクス・レーニン主義の発展であり、我々はそれを承認する。

第二章 帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代

⑬資本主義の帝国主義段階はプロレタリア共産主義革命の前夜である。第一次大戦とロシア革命によって世界プロレタリア共産主義革命の時代が始まった。ロシア共産党の綱領はこのことを次のように正しく特徴づけているので、我々はそれを継承する。

「⑭資本の集積と集中の過程は、自由競争を排除することによって、20世紀の初頭に、経済生活全体で決定的な意義をもつようになつた強大な独占的資本家団体—シンジケート、カルテル、トラストを成立させ、銀行資本と途方もなく集積された産業資本とを融合させ、外国への資本の輸出を強化させた。資本主義列強の幾多のグループを包括するトラストはすでに地域的に分割すみの地球の経済的分割を開始した。これは資本主義諸国家のあいだの斗争を不可避的に激化させる金融資本の時代、帝国主義の時代である。」

⑮ここからして帝国主義戦争が、すなわち販売市場のため、資本の

投下地域のため、原料のため、労働力のため、つまり世界支配のため、弱少民族にたいする支配権のための戦争が不可避的に生じる。一九一四—一九一八年の最初の帝国主義戦争こそまさにそういう戦争である。

⑯世界資本主義一般がきわめて高い発展水準に達していること、国家独占資本主義が自由競争にとって代わったこと、銀行並びに資本家団体によって物資の生産と分配の過程にたいする社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と労働者階級にたいするシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級が帝国主義国家によって隷属させられていること、プロレタリアートの経済斗争と政治斗争が巨大な障害に面していること、帝国主義戦争が惨禍や災厄や零落を生みだしていること——すべてこれらのことは資本主義の破綻と、より高度の型の社会経済への移行とを避けられないものにした。

⑰帝国主義戦争は公正な講和でおわることはできなかったばかりでなく、総じてブルジョア諸政府のあいだにいくぶんでも安定した講和が締結されることおわることもできなかった。こんにち資本主義が到達している発展段階にあっては、我々の目の前で不可避的にプロレタリアートを先頭とする被搾取勤労大衆のブルジョアジーに対する内乱に転化したし、また転化しつつある。

⑱ロシアの10月革命はプロレタリアートの独裁を実現した。プロレタリアートは貧農すなわち半プロレタリアートの支持を受けて共産主義社会の基礎を創設しはじめた。ドイツとオーストリア—ハンガリーにおける革命の発展の経過、すべての先進国でプロレタリアートの革命運動が成長していること、この運動のソヴェト形態すなわちプロレタリアートの独裁の実現をますますにめざす形態がひろまっていること——これらすべては世界プロレタリア共産主義革命の時代が始まったことをしめした。

⑲プロレタリアートの攻撃が増大し、特に個々の国々でプロレタリアートが勝利したことは搾取者の反抗を強めている。その結果、搾取者の側でも資本家の国際的統合の新しい諸形態（国際連盟、その他）をつくりだすにいたっている。資本家は地上のすべての国の人民の系統的な搾取を世界的規模で組織するとともに、すべての国のプロレタリアートの革命運動を直接に鎮圧することにその当面の努力を注いでいる。

⑳すべてこうしたことのため、個々の国家内の内乱と自己を防衛するプロレタリア諸国および被抑圧諸国民の帝国主義列強にたいする革命戦争とが結びつくことは避けられない。

㉑こういう事情のもとでは、平和主義のスローガン、資本主義のもとでの国際的軍備縮小、仲裁裁判所などのスローガンは反動的なニュートピアであるばかりか、勤労者を露骨に欺瞞するものであり、プロレタリアートを武装解除し、搾取者の武装解除という任務からプロレタリアートをそらせることを目的とするものである。

㉒帝国主義と帝国主義戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのはプロレタリア共産主義革命だけである。革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがあろうと、また反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利は避けられない。

㉓こうして帝国主義から社会主義への世界的過渡期へ入った。この過渡期世界には、帝国主義相互間の矛盾、帝国主義国におけるブルジョア階級とプロレタリア階級の矛盾、帝国主義と被抑圧民族の矛盾、帝国主義と社会主義国の矛盾という四大矛盾が存在する。

世界プロレタリア共産主義革命は、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会主義革命を継続する社会主義国の革命、民族解放、民主主義革命から社会主義革命へ進む後進国、植民地国の革命、先進国、帝国主義国、社会主義革命という三ブロックの革命の結合である。

⑳帝国主義世界大戦の結果、戦勝帝国主義と敗戦帝国主義の間に支配と従属の関係が形成され、帝国主義は革命に對抗して、ブルジョア階級独裁をファシズム、反動化し、植民地支配を形式上の独立を与える新植民地主義へ変化させ、国際反革命同盟を出現させた。この現代帝国主義は帝国主義世界大戦の回避をもたらず、世界プロレタリア共産主義革命を一層促進する。こうして、帝国主義に対して、社会主義国を根拠地として後進国、植民地国の民族解放の革命

戦争から先進国、帝国主義国の社会主義革命の革命戦争へと世界革命戦争が不可避に進行する。第二次大戦は帝国主義世界大戦であると同時に世界革命戦争であった。

②一九五〇年前後から一九七〇年前後までは帝国主義の相対的安定期である。第二次大戦に勝利した連合国の側の方では、中国、朝鮮、ベトナムなどと東欧の革命が社会主義革命へ発展した。他方では、米帝国主義がヤルタ体制として、老朽化した、英、仏帝国主義や敗戦帝国主義の西独、日本を従属させ、G A T T、I M FやN A T O、日米安保や国際連合などを中心に国際支配体制を確立した。これと社会民主主義、現代修正主義によってフランス、イタリアおよび日本の革命が敗北させられた。また、現代修正主義によってソ連が帝国主義へ、東欧がその植民地へ変質、転化した。この米帝国主義とソ連社会帝国主義の包囲の中で、中国、朝鮮北部、ベトナム北部ではプロレタリア階級独裁が強化され、社会主義建設が進められ、世界革命の根拠地となっていた。民族解放戦争がインドシナで堅持された。

③一九七〇年前後から戦争と革命の時代が始まりつつある。一方では、社会主義の中国、ベトナム北部、朝鮮北部が大後方となり、大前線であるインドシナの民族解放戦争が米帝国主義を打ち破り、その国際支配体制を解体的危機に陥れている。その後、インドシナの革命は社会主義革命へ発展し、民族解放斗争がアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ、つまり、第三世界の全域へ拡大しつつある。他方では、米帝国主義が崩壊しつつある覇権の維持、再編へ向い、これに従属的に同盟しつつ、その枠内で勢力圏再分割を目指す日本、西独帝国主義が登場している。また、ソ連社会帝国主義が米帝国主義に取って代って新たな国際支配体制を確立しようとして登場し、両者の間で覇権争奪、第三次世界再分割戦が開始されている。その主戦場は欧州である。そして、第二世界、つまり、二流の帝国主義である西欧と日本は資本主義の高度成長が破綻し、プロレタリア階級の階級斗争が激化し、ブルジョア階級独裁のブルジョア民主主義的統治形態が危機に陥りつつある。これに加えて、社会主義国を根拠地とするアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの民族解放斗争に直面し、第一次世界、つまり、米ソ二大帝帝国主義の世界再分割戦の主戦場となつてきていることよって帝国主義の弱い環を形成しており、ここで社会主義革命へ向けた革命情勢が端的に始まりつつある。米ソの第三次帝国主義世界大戦の危険性が増大している。と同時に、社会主義国を根拠地とする第三世界の民族解放戦争が拡大し、第二世界の社会主義革命戦争が始まり、世界革命戦争が前進することは不可避である。

④世界プロレタリア共産主義革命の終局のためには、世界単一のプロレタリア階級独裁が必要であり、世界各国のプロレタリア階級の国際的同盟として、思想的、政治的にマルクス・レーニン主義を基礎とした単一の世界党が必要である。これらのことは、プロレタリア階級の隊列内のブルジョア階級の手先である修正主義、口先での「社会主義」、実際の帝国主義である社会帝国主義と袂別し、斗かわなければ実現することはできない。

⑤ロシア共産党の綱領は修正主義、社会帝国主義の物質的基礎を次のように正しく示している。「こういう潮流を生みだしたのは、先進資本主義諸国家が植民地民族や弱小民族を略奪することによって、ブルジョアジーに、この略奪によって獲得した超過利潤の一小部分でプロレタリアートの上層に特権的な地位を与え、それによって彼らを買収し平時には相当の小市民的生活をこの上層に保障し、この層の指導者を自分の召使いとする可能性を与えているという事情である。」

⑥第二次大戦前後に現代修正主義が登場し、コミンテルン（国際共産党）を崩壊させた。

現代修正主義は、社会主義国では、プロレタリア階級独裁と社会主義革命を放棄し、ブルジョア階級独裁と資本主義を復活させた。ソ連は社会帝国主義として登場し、世界革命に敵対し、世界支配を目指している。現代修正主義は、先進国、帝国主義国では、暴力革命とプロレタリア階級独裁を放棄し、議会主義、改良主義に転落している。後進国、植民地国では、民族解放の主導権をブルジョア階級に譲り渡し、新植民地主義に屈服している。これと袂別し、斗争

しなければならぬ。

⑦中国共産党、ベトナム共産党、朝鮮労働党などはマルクス・レーニン主義党である。これらと結合して、新たなマルクス・レーニン主義の世界党を創建しなければならぬ。

中国共産党の毛沢東思想は、社会主義国については、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会主義革命を継続する路線であり、後進国植民地国については、プロレタリア階級が民族解放、民主主義革命の主導権を握り、連続的に社会主義革命へ進む路線である。中国共産党は世界革命を目指している。これらはマルクス・レーニン主義の路線である。しかし、中国共産党は世界単一のプロレタリア階級独裁とマルクス・レーニン主義党を否定している。

第三章 日本革命における

プロレタリア階級の任務

⑧帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代において、世界プロレタリア階級の共通の終局目標への途上で、各国のプロレタリア階級の当面の任務は、各国の国家と社会の性質が異なるので、各々異なったものとなる。

⑨第二次大戦までの天皇制の下で、また、第二次大戦後の米帝国主義の占領下で、日本革命は敗北した。現在の日本の国家権力は日米安保体制に基づく日本帝国主義、つまり、日本のブルジョア階級と米帝国主義の連合支配である。これは、日米安保条約によって、日本の自衛隊が在日米軍と不可分に結合していることに集中的に表現されている。現在の日本の社会は日本のブルジョア階級が支配する資本主義である。日本資本主義は高度に発達し、独占資本と金融資本が支配的であり、資本輸出が行なわれ、国際独占資本へ発達し、植民地支配を行なっており、帝国主義である。しかし、日本のブルジョア階級、つまり、日本帝国主義はプロレタリア階級と勤労人民を搾取し収奪し抑圧していくために、社会主義革命の反革命のために、米帝国主義と従属的に同盟し、これを自国に引き入れ、これに日本の民族主権の一部を譲り渡している。米帝国主義は日本帝国主義を下の同盟者とし、資本主義が発達した帝国主義国である日本一の植民地支配は米帝国主義を後盾としている。米帝国主義は日本帝国主義をアジアでの植民地支配の番犬、突撃隊としている。日米帝国主義は連合して、日本を支配する体制、アジアでの植民地支配体制を築いている。日本帝国主義と米帝国主義の間には、勢力圏をめぐる対立が存在し、米帝国主義の相対的下降と日本帝国主義の相対的上昇によって対立は激化している。しかし、依然として米帝国主義は一流帝国主義であり、日本は二流の帝国主義である。だから、勢力圏再分割は連合支配と安保体制の中で進んでいる。日本帝国主義は、51/52年の第一次安保、60年の第二次安保、70年の第三次安保の過程で力量を強め、勢力圏を拡大しているが、依然として、日米安保体制を堅持し、米帝国主義との連合支配にとどまっている。

⑩以上のことから、当面する日本革命の対象、つまり、敵は日米安保体制に基づいて連合して支配している日本帝国主義、つまり、日本ブルジョア階級と米帝国主義である。革命と任務と性質は、暴力革命で日米安保体制を粉砕し、一方では日本帝国主義を打倒する、つまり、ブルジョア階級独裁と資本主義を打倒し廃止する社会主義革命である。他方では米帝国主義を開放し、民族主権を完全に回復する民族解放である。日本帝国主義と米帝国主義が連合して支配しているの、革命のこの二つの任務は結合しており、同時に遂行されるのであり、従って、当面する日本革命は民族解放を含む一段階の社会主義革命である。

⑪当面する日本革命の原動力は日本帝国主義に対する社会主義革命の面ではプロレタリア階級と貧農半プロレタリアである。高度に発達した日本資本主義は生産の社会化を高度に実現し、社会主義革命の物質的基礎を準備すると同時に、農民と都市小ブルジョア階級を分解させ、巨大なプロレタリア階級を形成した。プロレタリア階級のブルジョア階級に対する階級斗争は激化している。生産の社会化を代表するプロレタリア階級が社会主義革命の原動力である。また、

(4) 生産手段を私有するが、それだけでは生活できず、一定期間労働力を売って賃労働に従事する貧農半プロレタリアは、ブルジョア階級に直接搾取されており、社会主義革命において原動力となることができ、プロレタリア階級の同盟軍である。この貧農は今日、農民の大部分を占めている。プロレタリア階級は貧農と同盟してプロレタリア階級独裁の国家権力を樹立し、資本、つまり、ブルジョア階級が私有し独占する生産手段を収奪し没収し、国家所有へ移さなければならぬ。生産手段を私有するが、家族労働に限られ、他人労働を搾取していない中農半ブルジョアと都市小ブルジョア階級は小商品生産者である。

そして、間接的にブルジョア階級に搾取されており、一部が資本家に上昇するが、大部分は没落しプロレタリア化する運命にある。それ故、社会主義革命の原動力ではないが、敵でもない。プロレタリア階級は中農と都市小ブルジョア階級を引き付けて社会主義統一戦線を結成し、小商品生産の生産手段の所有は、プロレタリア階級独裁の下で、収奪、没収するのではなく、説得、教育によって、低次から高次へ至る集団所有を経て、徐々に国家所有へ移していかなければならない。

米帝国主義に対する民族解放の面での原動力はプロレタリア階級、貧農、中農、都市小ブルジョア階級であり、これらの諸階級が民族を代表する。こうして、民族解放を含む社会主義革命である当面する日本革命において、プロレタリア階級は貧農半ブルジョアと同盟し、中農半ブルジョア、都市小ブルジョア階級を引き付けて社会主義統一戦線を結成し、暴力革命で日米安保体制を粉砕し、日本帝国主義を打倒し、米帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、社会主義を建設しなければならない。

日本革命の前途は共産主義の高い段階であり、これは世界プロレタリア階級の共通の終局目標であり、世界プロレタリア共産主義革命の勝利によってのみ達成できる。だから、日本のプロレタリア階級は、日本で社会主義を建設した後も、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会主義革命を継続し、世界革命の根拠地を建設していかなければならない。

51-53年の第一次安保の後、日本のブルジョア階級は50年代に安保体制の下で帝国主義として復活した。米帝国主義の朝鮮侵略反革命戦争の特需によって資本主義の復興に着手し、高度成長によって独占資本と金融資本を復活させ、強化し、この過程でプロレタリア階級が農民と都市小ブルジョアの分解によって増大し、階級斗争を強めるのに対して、ブルジョア階級独裁の国家権力、つまり、官僚機構、警察、軍隊を整備し強化したのである。それを反映したのが60年の第二次安保である。日本帝国主義は60年代に安保体制の下で「韓」条約に基づく南朝鮮をはじめとして、アジアに対する植民地支配を再開した。米帝国主義のインドシナ侵略反革命戦争の特需も利用しつつ、引き続き高度成長による独占資本、金融資本の強化とプロレタリア階級の増大に対するブルジョア階級独裁の国家権力の強化を進めながら、資本輸出と国際独占資本への発展と植民地支配を開始し推進したのである。これを反映したのが沖縄返還を眼目とする70年の第三次安保である。

現在、アジアの社会主義国を根拠地とする民族解放斗争がインドシナで米帝国主義に勝利し、南朝鮮を次の最前線としつつある。

これに対して日本帝国主義は、米帝国主義と連合し、朴政権を先として、朝鮮侵略反革命を強化している。南朝鮮人民の反米、反日、朴打倒の民族民主革命に対する反革命を強め、朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮人民の自主的平和的統一斗争への敵対を強めている。日本帝国主義はこの朝鮮侵略反革命の強化のために、また、プロレタリア階級の増強への対抗、社会主義革命に対する反革命のために、天皇制を前面化し、官僚機構、警察、軍隊を一層強化し、両者を結合させて、ブルジョア階級独裁の国家権力の統治形態をブルジョア民主主義から天皇制ファシズムへ反動化しつつある。と同時に、資本主義の高度成長が破綻し、恐慌が進行する中で国家独占資本主義を強化し、その下で、プロレタリア階級と勤労人民に対する搾取、収奪、抑圧を強化している。そして、これに対してプロレタリア階級と勤労人民は、朝鮮侵略反革命と戦争に反対する斗争、反動化と天皇制ファシズムに反対する斗争、国家独占資本主義の下での搾取、

収奪、抑圧の強化に反対する斗争などを激化させ、発展させ、爆発させつつある。総じて、日本帝国主義の体制的危機が始まり、深化し、社会主義革命へ向けた革命情勢が端的に始まりつつある。これらは、日本が米帝国主義とソ連社会帝国主義の覇権争奪、第三次世界再分割戦の戦場の一つとなりつつあることによって促進されている。

現在の日本における修正主義、社会帝国主義は社会党と「共産党」である。社会党は社会民主主義のいくつかの傾向の連合体であるが、中心は社会主義協会である。社会主義協会は暴力革命を放棄した「平和革命」の議会主義であり、「社会主義革命」「プロレタリア階級独裁」の名で、実は社会主義革命、プロレタリア階級独裁を放棄し、資本主義とブルジョア階級独裁に対する民主主義的改良を追求する改良主義である。「共産党」は現代修正主義に支配されている。現代修正主義は、日米安保体制下の日本を米帝国主義への従属国と捉え、日本の独占資本に対する革命を民主主義革命と捉え、結局、日本帝国主義に対する社会主義革命を放棄する誤りから発生した。現代修正主義の「共産党」は暴力革命を放棄した「平和革命」の議会主義であり、「民主主義革命から社会主義への二段階革命」の名で、実は社会主義革命、プロレタリア階級独裁を放棄し、ブルジョア階級独裁と資本主義に対する民主主義的改良を追求する改良主義である。「共産党」と社会主義協会はアジアの社会主義国と民族解放斗争、特に中国と南朝鮮人民の反日斗争に敵対して、日本帝国主義と結合しており、プロレタリア階級を小ブルジョア階級に追随させ、ブルジョア階級に屈服させており、ソ連社会帝国主義とも結合しており、社会帝国主義である。

以上からして、日本革命、つまり、日米安保体制粉砕、日本帝国主義打倒、米帝国主義追放、プロレタリア階級独裁、社会主義革命のためには、修正主義、社会帝国主義の「共産党」、社会主義協会を打倒し、日本プロレタリア階級を組織してマルクス・レーニン主義党を創建することが必要である。日本プロレタリア階級の前面であるマルクス・レーニン主義党の当面する基本的な任務は以下である。

(1) 対外関係の分野で。

- ① 党は、米帝国主義の追放のために、日米安保条約の破棄、米軍の撤退、対米関係での民族主権の完全な回復のために闘う。
- ② 党は、日本帝国主義の植民地支配の廃棄のために、日「韓」条約の破棄、朝鮮民主主義人民共和国の承認のために闘い、植民地被抑圧民族の自決権を承認する。米帝国主義と日本帝国主義の朴政権を先とした朝鮮侵略反革命に反対し、朝鮮人民の自主的平和的統一斗争、南朝鮮人民の反米、反日、朴打倒の民族民主革命、在日朝鮮人の民主的民族的権利のための斗争を支持して闘う。
- ③ 党は、米ソ二大帝国主義の覇権主義に反対し、社会主義国と共に第三世界の民族解放斗争を支援して闘う。

(2) 一般政治の分野で。

- ① 党は、日本帝国主義のブルジョア階級独裁である自衛隊、警察、官僚機構などの現在の国家権力を解体し、プロレタリア階級と勤労人民の武装を実現し、プロレタリア階級独裁の新しい国家権力、赤軍、革命政府などを樹立するために闘う。天皇制を廃止し、共和制を実現するために闘う。
- ② 党は、国内の沖縄、アイヌなどの少数民族に対する日本帝国主義の民族的抑圧に反対して闘い、これらの民族の自決権、つまり、国家的に分離する権利を承認し、国家を構成する全ての民族の完全な同権を実現するために闘う。
- ③ 党は、プロレタリア階級と勤労人民がブルジョア階級独裁に対して民主主義斗争を闘うのに対して支持し、指導すると同時に、改良主義に反対し、プロレタリア階級独裁によってのみ真の民主主義が実現できることを主張する。

(3) 経済の分野で。

- ① 党は、ブルジョア階級が私有し独占する生産手段および流通手段を収奪、没収し、プロレタリア階級独裁の下で社会主義の国家所有

とするために闘う。銀行をプロレタリア階級独裁国家の所有とするために闘う。勤労農民が私有する以外の土地をプロレタリア階級独裁国家の所有とするために闘う。

◎党は、農民をはじめとする勤労人民が他人労働を搾取しないで私有している土地その他の生産手段については、プロレタリア階級独裁国家の下で社会主義の集団所有とするよう説得する。

○党は、プロレタリア階級と勤労人民が資本主義による破壊から生活を守るために経済斗争を闘うのに対して支持し、指導すると同時に、改良主義に反対し、社会主義革命によってのみ完全に生活が保

障されることを主張する。

(4) その他の分野で。

党は、日本の現在の国家および社会制度に対して斗かわれる部
落解放斗争や婦人解放斗争やその他の勤労人民の解放斗争を支持し、
指導すると同時に、改良主義に反対し、真の完全な解放は、日米安
保体制粉砕、日本帝国主義打倒、米帝国主義追放、プロレタリア階
級独裁、社会主義革命によってのみ可能なことを主張する。

名称の変更に関する決議

決議

われわれは、共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派と名のらなければならぬ。

われわれは、自分が現代修正主義に転落した『共産党』から決別し、トロツキズムの革

共同に反対してきた共産主義者同盟(ブンド)の一分派であり、ブンドの急進民主主義的側面を清算し、マルクス・レーニン主義的側面を継承・発展するマルクス・レーニン主義者であることをくりかえしていわねばならない。すなわち、70年前後に日本帝国主義の体制的危機が始まり、革命情勢が端的に始まる中で、ブンドは、一方で武装斗争に着手し、他方では労働運動との結合を開始した。

しかし、ここで急進民主主義は、戦術と組織問題について、一方では武装斗争へ着手という成長を反映する病であるテロリズム・戦闘主義へ純化し、他方では労働運動との結合の開始という成長を反映する病である経済主義、合法主義へ純化し、ブンドは分裂した。

「我々は、この点ではブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義を獲得する」(高原『綱領草案』)つまり、名称の変更の第一の論拠は、我々が社会主義(共産主義)と労働運動の結合であるマルクス・レーニン主義を獲得したことを明確にすべき点にある。

第二の論拠。わが共産主義者同盟赤軍派マルクス・レーニン主義編集委員の名称は、組織の現実を正しく表現してゐない。われわれが、「戦争と革命の時代」の中で、日帝が体制的危機に直面し、革命的情勢が端的に始まり、上層も下層もこれまで通り生活でできなくなった情勢に対し、レーニンの「三大義務」を三大任務として豊富化し、日帝打倒・プロ独・社会主義革命の系統的宣伝・扇動・暴露と革命戦争と武装して闘う非合法党の創建の

斗いに踏みだして、既に一年半になる。つまり、われわれは、現に党派であり、わが組織の名称の後半「編集委員会」は組織の現実、実体を正しく表現してゐない。サークル的印象を労働者勤労人民に与えている。更に、われわれは、六つのスローガンを基礎とし、これをみながあげ、深める中で、われわれの隊列にもぐりこんでいた投機分子・野心家を摘発し、追放し、逐に、組織としての『綱領草案』を克ち取った。

第三の論拠。わが組織の名称の前半「赤軍派」も政治的に正しくない。結成当時、われわれは「旧同盟の諸同志達の英雄的、献身の闘いの精神を引き継ぎ、旧同盟の斗争とその結果に対して、正しい側面(成果)も誤っていた側面(自己批判)も全て組織として、その責任を全て引き受ける」といった。われわれは、たえず赤軍派、連合赤軍の総括作業を推進してきた。その結果、われわれは、現在、赤軍派、連合赤軍の路線を以下の如く総括している。赤軍派の路線の基本的な主要な側面は急進民主主義だった。そして急進民主主義のうち、テロリズムが基調であり、これに経済主義が未分化のまま混在していた。この急進民主主義が両極分解し、テロリズムが連合赤軍を制圧し、経済主義が連合赤軍から脱走、逃亡したのである。しかし、この赤軍派の路線には副次的、部分的側面としてマルクス・レーニン主義が存在していた、と。

殺された12名は、未熟ながらマルクス・レーニン主義のプロレタリア革命派であった。しかし、明確な路線を持っては登場しえなかったために経済主義者の脱走、逃亡を許し、テロリズムに敗北し、肅清されたのであった。「だから、我々が殺された12名を未熟ながらマルクス・レーニン主義のプロレタリア革命派として支持し、継承し、発展させ綱領、戦術、組織の全てについて明確な路線を持って登場しようとするれば、一方ではテロリズム、

他方では経済主義である急進民主主義を、この赤軍派の路線の基本的な主要な側面を自己批判し、清算しなければならぬ」(『プロレタリア急進民主主義を批判する』)

それゆえ、われわれは、わが組織の名称から赤軍派を削除する。…ところでこれは赤軍派の清算ではないのか?という反論もあろう。われわれは、赤軍派の路線の未熟ながら存在したマルクス・レーニン主義の側面を継承する。殺された12名の闘いを支持し、継承し、組織としてマルクス・レーニン主義の『綱領草案』を克ちとったわれわれは、この成果を、観点を明確に、一点の曇りもなく明確にするために、赤軍派の路線の基本的な主要な側面の自己批判を徹底するために、あえて赤軍派を削除するのだ。

われわれは、着なれた、なつかしい、汚れたシャツをぬぎすてる。組織としてマルクス・レーニン主義の『綱領草案』を克ちとり、プロレタリア革命斗争に実際に着手しているわれわれにふさわしい上着を着ることにする。

2月×日

共産主義者同盟赤軍派マルクス・レーニン主義編集委員会

寿越冬闘争報告

寄せ場労働者に今年も冬将軍が、訪れて来た。12月5日より始まった越冬斗争は、「一人の仲間も死なすな」「仕事よこせ」「生きて奴等にやり返せ」と防衛の闘いから反撃の闘へと前進し、12・25、1・16の日帝ブルジョア階級の暴力装置機動隊・警察権力の組織破壊へ向けた弾圧にも屈せず、下層労働者―寄せ場労働者の解放へ向けた闘いが組織化されている。

現在世界は、ベトナム・インドシナの民族解放後社会主義建設へ前進し、マレーシア・インドネシア・タイ・フィリピン等と打ち続く第三世界の解放斗争が激発し、戦後世界体制の盟主として君臨して来た米帝国主義が一定後退して、社会帝国主義へ変質したソ連が覇権を求め、米・ソ二大帝国主義による第三次市場分割の危機が増大している。

この情勢下において、安保体制の下、米帝との連合支配である二流の帝国主義―日帝内には、石油危機・自民党単独支配の崩壊・等と資本主義の矛盾が激発し、体制的危機が進行している。

日帝ブルジョア階級は、今まで通の議会制民主主義ではプロレタリア階級・人民を支配し切れなくなり、天皇制ファシズムへと統治形態を転換し、強権の暴力支配で持つて統治せんとしている。プロレタリア階級・人民には、収奪・搾取・抑圧が強化され、今まで通りの生活が出来なくなっている。まさに、現在、戦争と革命の時代に入っている。

この状況下において寄せ場労働者には、日本資本主義の矛盾が集中し、仕事を奪われ、社会的に保障されている生在権すら奪われている。まさに、下層労働者―寄せ場労働者にとって、武装して闘う非合法党・マルクス・レーニン主義党を建設し、プロ独・社会主義革命へ向けて邁進する道だけである。

下層労働者―寄せ場労働者の階級的位置

日本資本主義は、生産が社会化されているにもかかわらず生産手段が少数の独占ブルジョアに握られ、プロレタリア階級はブルジョア階級に経済的隷属させられ、そして、産業予備軍として形成させられた下層労働者



は、ブルジョア階級がプロレタリア階級から剰余価値を、強搾取する目的のために利用されて来た。そもそも、日本資本主義の復活と発展・膨張は、普段に技術の導入をはかり、徹底した合理化を行ない、労働を単純化し、婦人・児童を労働者の隊列に加え、農・漁村を崩壊させ独占ブルジョアの下に労働力として包摂し、こうして、労働力に対する需要を相対的に減少させ、労働の供給は絶対的に増加させる過程であった。この相対的過剰人口を独占ブルジョアは、労働者の相対的賃金の切り下げのために利用して来た。

そして、下層労働者は、日本資本主義の主要な生産関係から排除され、労働市場の底辺におかれ、ブルジョア階級に強搾取される、と同時に、ブルジョア階級独裁の民主主義的統治形態から普段に疎外され、プロレタリア階級・人民の差別―分断のために利用されて来た。

又、相対的過剰人口の下、創出された下層労働者は、産業の安全弁として利用されて来た。「高度経済成長」の時、下層労働者は、港湾・土木・建築・等の底辺労働力として酷使され、独占ブルジョアの剰余価値を高めた。それが、石油危機・等、ここ数年来の体制的危機を乗り切るためにブルジョア階級は、合理化―首切りを行ない、真先に下層労働者の仕事を奪い、産業の安全をはかるようにして来た。

下層労働者―寄せ場労働者の闘い。

寄せ場労働者は日帝が「高度成長」から「低成長」に変わらざるをえなくなった結果、働くにも働く仕事がなく毎日数多くの労働者が、完全失業の状態におかれている。

この状態を打破する闘いが、12・24、1・16と大衆実力斗争として発展し、社「共」を主柱として形成されている長州・飛鳥田の革新行政の「日雇切り捨て、日雇殺し」を暴力糾弾し、「仕事よこせ」「生きる権利を保障せよ」と実力行動を貫徹した。そして、1・16においては、寄せ場労働者200余名が結集し「日雇解放・仕事よこせ斗争勝利・総起決集会」が勝ち取られ、「生きて奴等にやり返せ」のスローガンの下、寄せ場において、日常的に反動的暴力支配を行ってきたポリ公に労働者の怒りの鉄槌を加え、自治会長の座を利用し、暴利をむさぼって来た「秋場」を糾弾する闘いとしてデモは貫徹された。

この様な正当な闘いに対して、一切の矛盾を寄せ場労働者に転嫁し、1・16においては機動隊200余名を導入し、ムキ出しの暴力行爲を行ない、数多くの労働者に重傷をおわせ、数名の労働者を不当に逮捕して行った。この不当な弾圧に労働者は怒り、逮捕された先進的労働者を奪還すべく実力行動が1・30に250

余名の労働者が結集し、「1・16反弾圧・緊急集会」が勝ち取られ、圧倒的デモが貫徹された。いかに、ブルジョア階級が、寄せ場労働者を弾圧しようが、燃え上がった炎を消すことは出来ない。闘いはこれからだ。

組織化

寄せ場労働者は、仕事を奪われた部落民・在日朝鮮人・沖縄人・「障害者」・労働者等で占めている。まさにこれらの諸階層・諸人民を結集せしめ、そして、帝国主義労働運動のJO同盟下において、先斗的に闘っているプロレタリア階級においても下層労働者―寄せ場労働者は、切り捨てられていた。このブルジョア階級独占の階級分断攻撃を粉碎し、単一の労働者階級として連帯して行かなければならない。

まさにこのことは、経済斗争・民主主義斗争を行なうだけの連帯ではなく、ブルジョア階級独裁にプロレタリア階級独裁を対置させ、日本帝国主義を暴力革命で打倒する武装して、闘うマルクス・レーニン主義党の建設を目指して！

このことは、1・16の大弾圧を見よ、ブルジョア階級独裁の暴力装置機動隊・警察が、ブルジョア階級の利益を守るために、反革命弾圧体制を遂行したではないか。

革命戦争を準備せよ！

下層労働者は、いまままで通りの生活を望まなくなっている。ブルジョア階級の階級支配を打倒し、プロ独―社会主義革命を望んでいる。今こそ、革命戦争を準備しなければならぬ。武装して闘うマルクス・レーニン主義党を建設し、その下に、プロレタリア階級・人民の闘い分隊、労・農・水・学の社会主義統一戦線―赤軍を形成し、安保粉砕・日帝打倒米帝追放・プロ独・社会主義革命を邁進して行かなければならない。

その下において、始めて下層労働者・寄せ場労働者は、解放される。

獄中の釜ヶ崎 日雇労働者団長に聞く

釜ヶ崎越冬斗争の最中に、でたらめな告訴をたてにデッチアゲ逮捕され、西成署では、額を突く、耳のそばで大声でどなる、腰にくくりつけた縄を力一杯引くなどの暴力的取調べをされ、大阪拘置所に移送されてからは、調べ拒否で権力の密室での強行に抗している稲垣浩委員長に釜ヶ崎の斗争について質問し、その返事をもらった。

めきめきと活動家になりつつある労働者

―釜ヶ崎における権力の弾圧について聞かせて下さい。

稲垣 現在、私が拘留されているのは、第七回越冬斗争と釜日労働に対する弾圧です。全港湾・西成分会の運動とも、また従来の釜共闘の闘い方とも違った釜日労働の運動に警察はにがり切っておるわけです。私はすでに逮捕歴10回を数え、権力から集中的弾圧を受けております。また、釜ヶ崎の労働運動に連帯しようとして駆けつけてくる労組の人々に嫌がらせの職質(強引に西成署につれ込み面割をする)を執ようにやっています。労働者の団結と連帯が権力にとって恐ろしいものなのでしょう。一月十七日には仲間の橋野勲氏、二十四日には「深田」書記長(難波明美氏)が不当逮捕され、現在、大拘にきております。しかし、私達は一年以上、毎日、毎日、炊き出しを権力の妨害をはねのけつつけてきたし、暴力飯場とも斗ってきたのです。たとえ一人になっても闘いを継続する決意がみんなには出ています。

―釜日労働結成のいきさつ、そして釜日労働が活動しはじめてから以前と変わった、成長したと思う点について聞かせて下さい。

稲垣 以前の釜共闘の闘いのすばらしいところは敵に対して暴力で対決したこと。私達は実力斗争をやめません。しかし、やりたい時にやる、責任体制が明らかでない、要するに気まぐれ集団という弱点がありました。私達は日常活動を保障し、責任体制を明らかにして運動のすみかさねをしてゆこう。でないと労働者に信用されないと思います、おもいきって昨年七月一日に組合を結成し、個人主義的な運動に見切りをつけたのです。炊き出し、野宿、たき火などを確保しつつ、暴力飯場、賃金未払い、労災等々、労働者が持ち込む相談に大衆斗争を大胆に展開する方向で斗ってきました。この結果、ふまれてもけられても起き上がり闘う釜日労働は労働者大衆の信頼を勝ち取りつつあり、年末一時金のカンパのおりには三九万数千円も集まり、一人平均百円のカンパとして、今は釜ヶ崎の日雇労働者は二万人といわれておりますから、実に五人に一人は我々の運動を支持していることになりました。これは実感としてあります。それと、労働者が私利私欲にとらわれず、献身的に炊き出し活動、医療活動、パトロール、大衆斗争を斗えるようになってきたこと、めきめきと活動家になりつつある労働者がおります。これは非常に心強いことです。

―組合内部での経済主義、一揆主義、閉鎖主義あるいは腐敗思想との闘い、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想を広めることについてはどうなのでしょう。

稲垣 寄せ場は、資本家階級より腐敗・墮落を強制されております。これとの闘いは重要だと考えております。運動に参加することを要請し、共に闘う中で運動に対する確信をしっかりともってほしい、そして意見を述べてもらい、論争します、等をくり返す中で活動家が生まれます。辛抱強く闘うことが大事だと思います。ただ、系統だった学習会というのが組織出来なくて、これが一番の弱点です。克服しなければならぬと思っています。まともな書けませんが悪しからず。

―釜ヶ崎の斗争と社説との関係、総評・同盟などの労働貴族の鎖にしばられている労働者大衆との団結についてどう考えていますか。

稲垣 社説に対する私達の評価はベテネ師と位置づけています。労働貴族と労働者は分けて考えています。総評青年部は私達に好意

的ですが、日雇労働者と就業労働者の団結を私達は求めております。昨年十一月二十五日には桜宮公会堂で全労働者の団結をめざして、釜ヶ崎日雇労働者反撃集会を持ち、三百名近い労組、市民団体が結集して集会の成功を勝ち取りました。キリスト教関係者、大阪市従の有志、三里塚連帯する会の有志、大阪労活、大阪地本争議団共闘、平和台病院労組、関単労、郵便労働者、解放研、神戸の子供会、北大阪合同労組など多くの人々が支援してくれています。日雇労働者に対する予断と偏見からくる差別と私達は斗っています。これを理解してもらい、これと闘うことを就業労働者に求めています。もちろん私達自身も差別とは精神的に斗っています。また、例の花園公園ロックアウト(鉄のフェンスで立入禁止)の背景には、府議団・市議団がこれを支持したという事実がある。自民から共産までの議員がすべて花園公園を越冬寒に貸すことに反対なのです。府議団・市議団が反対すればイコール市民が反対していることになるのです。日雇労働者の生存権は市民の「声」に踏みにじられるということですね。どっこい生きぬくというのが我々の立場です。やられてもやられても市民に対する説得はあきらめません。

―組合や住民組織だけでは、労働者階級の根本的解放を勝ちとれませんが、委員長は全国の組合・住民組織などの大衆組織を権力奪取の蜂起にむけ、一個の赤い砲丸となす労働者階級の前衛党の建設について、どう考えていますか。

稲垣 前衛党は労働者階級の権力奪取には必要不可欠ですねというのとどめておきたいと思っています。

―奥さん、子供がいると仲々、斗えないという労働者も多いのですが、委員長の戦斗的プロレタリア家庭の秘訣を?また最後に読者にあくまで闘い抜く決意表明を。

稲垣 私が連行されてゆく時、泣いて母親にしがみついていた子供の姿を思い出すとたび警察権力に対する憎しみは増すばかりです。たとえ親子がバラバラにされたって闘いはやまるものではありません。夫も闘い、妻も闘い、子も闘うということを自覚することではないですか、お互いがね。闘いはロマンではありませんからね。最後に、釜ヶ崎の労働運動は一つには現に働いている日雇労働者の権利を確保し、守ること、もう一つは働きたくても仕事のない労働者の権利を守り、獲得すること、この二つを闘いぬかなければならない。このどちらか一つが欠けても釜ヶ崎の労働運動はなりたないと思います。また、日雇労働者に対する差別とも闘うことです。例えば日雇労働者が死んだ場合「行路病死」ですが、ほとんど行政解剖される。そのあと、丸裸で火葬場へ運ばれ焼かれる、といった人間として扱われてない現実と闘い、阿部野齊場までいって大阪府を糾弾し、この結果、大阪市は法衣を着せる約束をしたことがあります。年間三百人近い人が病院にも入れず路上で「行路病死」ということで釜ヶ崎で殺されています。この闘いがたとえ五年、十年、それ以上かかろうと釜ヶ崎に根をおろして闘い抜いてゆきたい以上、

労働運動と社会主義の結合へ

同志・読者諸君、労働者は経済斗争の実践の中で、資本主義の攻撃に対して自らの生活を守るためには団結が必要であることを学ぶ、だが、やはり、こうした経済斗争だけではたとえその斗争で勝利しても、労働者が賃金奴隷であることには変らない。労働運動に社会主義を結合させ、権力奪取・生産手段の資本家階級から収奪を目指し、根本的解放たる社会主義革命のために、経済斗争で獲得した団結を使おう!社会主義革命による釜ヶ崎完全解放万才!

(尚、稲垣氏は、二月五日に保釈を勝ち取った)

ブルジョア・レーニン主義の第二次ブレスト・リトフスキ建設せよ

我々は、暫定綱領である〔I〕〔V〕の六つのスローガンを基礎として綱領草案を獲得した。我々は、日本プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党を創建しなければならない。

第一に、ブントを総括し、ブントの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブントを結成する所から始めなければならない。

第二に、綱領問題での一致を獲得し、基礎としなければならない。「思想面・政治面での路線が正しいかどうかすべてを決定する」(毛沢東) 第三に、綱領問題だけでなく、戦術・組織問題での一致も獲得しなければならない。綱領問題と戦術問題とにおける統一は、党を統合し、党の活動を中央集権化するための必要条件であるが、まだ十分な条件ではない。そのためには、さらに組織の統一が必要である」(レーニン『一步前進・二歩後退』)。

☆ 第一章 ブントの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブントを結成しよう

我々は、綱領草案の前文の①で、ブントを総括し、ブントの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブントを結成する所から出発して、マルクス・レーニン主義党を創建する方向を示している。

ブントは基本的に、共産主義と労働運動の分離を反映する急進民主主義であった。武装闘争に着手し、労働運動との結合を開始した時点で分裂した。一方では、共産主義革命を小ブルジョアインテリゲンツィアの個人的闘争で実現しようとし、武装闘争への着手という成長を反映する病であるテロリズムとなった。他方では、労働者階級の階級闘争を経済闘争、民主主義闘争にとどめ、労働運動との結合という成長を反映する病である経済闘争となった。これは清算しなければならない。

現在、ブント系では、急進民主主義の基盤の上で、テロリズムと経済闘争を再統一し、労働者階級の経済闘争・民主主義闘争の暴力闘争・武装闘争化だけをもって、外見上、一見、プロレタリア革命派のように装っている潮流がある。この潮流とは闘かわなければならない。同時に、一方では武装闘争への着手という成長を堅持しつつ、テロリズムを清算し、その根本にある急進民主主義を清算しようとする潮流があり、他方では、労働運動との結合という成長を堅持しつつ、経済主義を清算し、その根本にある急進民主主義を清算しようとする潮流がある。マルクス・レーニン主義を獲得して、この二つの潮流を結合しなければならない。

「社会民主主義は、労働運動と社会主義との結合である」(レーニン『われわれの運動の緊要な諸任務』) マルクス・レーニン主義は、プロレタリア階級独裁をカナメとする共産主義と労働運動の結合である。一方では、共産主義革命を、労働者階級の階級闘争・プロレタリア階級独裁で実現し、他方では、労働者階級の階級闘争をプロレタリア階級独裁・共産主義革命にまで拡大しなければならない。労働者階級を組織してマルクス・レーニン主義党を建設しなければならない。

以上は、思想路線、綱領の原則的部分で(資本主義批判)の問題である。

国際路線、綱領の歴史的部分(帝国主義批判)については、第二次ブントが、アジアの社会主義国・民族解放闘争に敵対するトロツキズムの革共同に反対して確立した路線、つまり、アジアの社会主義国・民族闘争と結合して日本の社会主義革命を推進する路線を基本的に継承すればいい。ただ、一国社会主義と社会主義におけるプロレタリア階級独裁を否定するトロツキズムの影響を受けたといっ

てる不十分性を克服しなければならない。

政治路線、綱領の実践的部分(日本帝国主義||日本資本主義批判)については第一次ブントが、反米反独占人民民主主義革命から社会主義革命への二段階革命である現代修正主義の「共産党」から訣別して確立した路線、つまり、日帝打倒・社会主義革命の路線を基本的に継承すればいい。ただ、米帝の支配を見落し、米帝追放の民族解放を欠落させている不十分さを克服しなければならない。我々は、獲得した綱領草案を基礎に、以上のような綱領論争を提起し、ブント系の統合に乗り出すつもりである。

☆ 第二章 テロリズム・経済主義の急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得しよう。

第一節 ブルジョア階級とプロレタリア階級

我々は、綱領草案の③で、資本主義の生産関係、つまり、ブルジョア階級とプロレタリア階級の階級関係を批判し、暴露している。

「労働手段、すなわち隷属制の、社会的貧困・精神的萎縮・または政治的従属の基礎である」(第一インターナシヨナル一般規約前文)。

資本主義の生産関係においては、第一に、生産手段の所有制について、生産手段を独占的に私有する資本家階級に、生産手段から分離した労働者階級が経済的に従属している(ブルジョア階級はその政治的反映)。ここから、労働者は、生きていくためには労働力を売って資本家の雇い人になる以外にない。この結果第二に、生産における人と人との関係について、労働者は剰余価値の生産を目的とする資本家の指揮の下で、工場内で奴隷労働を強制され、また第三に、生産物の分配制について、労働者は必要労働の分の賃金として得るだけで、剰余労働の分は資本家が無償で取得し、搾取するのである。これがマルクス・レーニン主義の見地である。

だから、共産主義革命の中心任務、労働者階級の解放の基礎は、第一に、所有制について、生産手段を資本家階級から収奪して、社会の共有に移すことである。(プロレタリア階級独裁は、その政治的条件)。この結果、第二に、人と人との関係について、工場内での奴隷労働を廃止し、さらに社会的分業の矛盾を解決することができ、また、第三に、分配制について、搾取を廃止し、労働に応じた分配を実現し、さらに、必要に応じた分配を実現することができるのである。

所が、急進民主主義は、生産手段の所有制の批判をあいまいにし、批判を生産における人と人との関係・工場内での奴隷労働や生産物の分配制・搾取へ一面化する。こうして、労働者階級の階級闘争が反合理化や賃上や経済闘争(その政治的反映としての民主主義闘争)にとどめられるのである。

第二節 プロレタリア階級の階級闘争と共産主義革命

我々は、綱領の草案の④でプロレタリア階級の階級闘争と共産主義革命の関係を示している。

「社会化された生産と資本主義的占有との間の矛盾は、プロレタリア階級とブルジョア階級との対立となって現われる」(エンゲルス『反デューリング論』)。

資本主義は、資本関係そのものを拡大再生産し、所有と労働の分離が必然化する。資本の蓄積は、一方に、生産手段を占有するより多くの資本家を、または、より大きな生産手段を占有する資本家を再生産し、生産手段から分離した労働者をより多く再生産する。労働者階級と資本家階級の階級対立を激化し、生産の社会化と取得・所有の私的性格として、生産力と生産関係の矛盾を進展させる。

経済における生産の社会化と取得・所有の私的性格の矛盾、共産主義革命を必然化する生産力と生産関係の矛盾は、政治的には労働者階級と資本家階級の階級対立・階級闘争に表現される。だから、共産主義と労働運動を結合し、一方で、共産主義革命を労働者階級の階級闘争・プロレタリア階級独裁で実現し、他方で、労働者階級の階級闘争をプロレタリア階級独裁・共産主義革命にまで拡大するがマルクス・レーニン主義の見地である。

所が、急進民主主義は、一方で生産の社会化と取得・所有の私的性格の矛盾と他方で労働者階級と資本家階級の階級対立とを切り離して把える。だから、共産主義と労働運動を分離し、一方では共産主義革命を小ブルジョアインテリゲンツィアの個人的闘争で実現しようとし、他方では、労働者階級の階級闘争を経済闘争・民主主義闘争にとどめるのである。

第三節 プロレタリア階級とマルクス

レーニン主義

我々は綱領草案の⑩で、プロレタリア階級の革命的階級への形成とマルクス・レーニン主義の建設との関係を示している。

「有産階級の団結せる力に対する闘争において、プロレタリアートが階級として立ち現われることができるのは、プロレタリアートが有産階級の手で作られた従来のあらゆる政党に対立する特別な政党を自らの手で構成するに過ぎないだけである。

政党へのプロレタリアートの団結は、社会革命とその窮極の目的の勝利階級の閉止を確実なものとするための必要不可欠なことからである」(第一インターナショナル一般規約第七条付則)。

プロレタリア階級は、革命的階級として、共産主義革命・プロレタリア階級独裁のための政治闘争を実行するためには、マルクス・レーニン主義に組織されなければならない。階級形成と党建設は一元的な関係である。

急進民主主義は、階級形成と党建設を二元化する。こうして、一方では、党をプロレタリア階級を党から切り離し、労働組合・ソヴエイト・赤軍などの大衆組織に組織するにとどめるのである。

第三章 反スタ・トロツキズムを批判し、

反帝・反社帝・マルクス・レーニン主義

・毛沢東思想を獲得しよう!

第一節 プロレタリア階級独裁と社会主義

我々は、綱領草案の⑩で、プロレタリア階級独裁と社会主義の関係を示している。

「資本主義社会と共産主義社会との間には、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応して、また政治上の過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリア階級の革命的独裁以外のものではない(マルクス『ゴータ綱領批判』)。

「資本主義から共産主義への移行は、もちろんきわめて多数のさまざまな政治形態をもたざるをえないが、しかし、そのさい、本質は不可避免的にただ一つ、プロレタリアートの独裁である」(レーニン『国家と革命』)。

社会主義は、共産主義の低い段階であり、完全な共産主義ではなく、資本主義から共産主義への革命的転化、移行が完全に実現されてはいない。だから、プロレタリア階級独裁が必要である。このことを明確にした点で毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の発展である。

(9) 社会主義においては、生産関係の生産手段、所有制の面では、共産主義革命が達成され、社会による共有制が実現され、階級は廃止されている。しかし、生産における人と人の関係の面では、社会的分業の矛盾が残存し、個人的消費資材の分配制の面では労働に

た分配である。これは資本主義の残存物・ブルジョアの権利であり、生産手段所有制へ反作用し、ブルジョア階級・資本主義を復活させる危険性がある。さらに、上部構造にはブルジョアイデオロギーが残存し、ブルジョア階級が残存している。これは、ブルジョア階級独裁を復活させ、反作用によって資本主義を復活させる危険性がある。こうして社会主義においてもプロレタリア階級とブルジョア階級の階級対立・階級闘争、社会主義と資本主義の二つの道をめぐる階級闘争が存在している。だから、社会主義においても、プロレタリア階級の階級闘争を推進し、プロレタリア階級独裁を堅持し、生産手段の社会による共有制を保持しなければならぬ。これを基礎として、生産力の発展を促進し、人と人の関係や個人的消費資材の分配体制の面では、さらには上部構造で、共産主義革命を継続しなければならぬ。資本主義の残存物を消滅させ、社会的分業の矛盾を解決し、ブルジョアの権利を消滅させ、必要に応じた分配を実現していかなければならぬ。ブルジョアイデオロギーを批判し、ブルジョア階級を消滅させなければならぬ。共産主義の高い段階を実現する原動力はプロレタリア階級独裁の堅持・共産主義革命の継続である。

ブンド系の多くは、プロレタリア階級独裁の下での継続革命を、資本主義から社会主義への過渡期にとどめている。これはトロツキズムの影響である。トロツキズムは、社会主義においては、共産主義の高い段階の実現のために、プロレタリア階級独裁と共産主義革命は必要ないとする点でブルジョア階級独裁と資本主義の復活をもたらした反革命的現代修正主義と同じである。

第二節 一国社会主義

「経済および政治的發展の不均等性は、資本主義の無条件的な法則である。ここからして、社会主義の勝利は、はじめは少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国でも可能である。という結論が出てくる」(レーニン『ヨーロッパ合衆国のスローガンについで』)。

かつてのソ連や現在の中国は、プロレタリア階級独裁の下で、生産手段が国家の経済部門と集団の内部では生産手段が共有となり、能力に応じた分配が実現されている。社会主義である。一国社会主義は可能であり、また、世界革命の根拠地を建設するために必要である。

ブンド系の多くは、トロツキズムの一国社会主義に対する不可能論・反対論の影響を受けている。トロツキズムは、一国社会主義を不可能とし、プロレタリア階級独裁の下で、資本を国有化し、農業を集団化し、社会主義革命を継続するのに敵対している。同時に、社会主義革命の開始・プロレタリア階級独裁の樹立に敵対している。世界革命の根拠地を建設するのに敵対している。反革命となるのである。

第四章 日米安保体制を粉砕し、日本帝国

主義を打倒し、米帝国主義を追放し、プ

ロレタリア階級独裁を樹立し、社会主義を建設し、共産主義を実現しよう。

我々は、綱領草案の⑩で日本の国家と社会の性質を示し、⑪で日本革命の前途を示している。

「帝国主義にとって特徴的なのは、まさに農業地域だけでなく、もっとも工業化された地域すら併合しようとする志向(ベルギーにたいするドイツの欲望、ロレーヌにたいするフランスの欲望)である(レーニン『帝国主義論』)。

現在の日本帝国主義の特殊性は、敗戦帝国主義であり、二流帝国主義であるということから、戦勝帝国主義で一流帝国主義である米帝国主義に從属的に同盟した從属帝国主義であるということである。日米安保体制下で、日本のブルジョア階級は基本的に国家権力・軍隊・警察・官僚機構を握り、動かしている(ブルジョア階級独裁)。基本的に独立している。しかし、米帝が駐留し、基地を保有し、米帝が部分的に支配を継続している。日本の軍隊・自衛隊は、米帝に一定程度從属している。ここに、日帝の米帝への一定程度の從属がある。

現在の日本の国家権力は、日米安保体制に基づく日本のブルジョア階級つまり日本帝国主義と米帝国主義の連合支配である。

当面する日本革命は、暴力革命で日米安保体制を粉砕する革命である。つまり、一方では、日本帝国主義を打倒し、自衛隊・警察・官僚機構を粉砕し、全人民の武装を実現し、プロレタリア階級独裁を樹立し、資本を国有化し、農業を集団化し、社会主義を建設する社会主義革命である。また他方では、米帝国主義を開放し、米軍を撤退させる革命であり、これは民族解放である。日帝と米帝が連合して支配しているので、日帝打倒の社会主義革命と米帝開放の民族解放は同時に進行する。当面する日本革命は、民族解放を含む一段階の社会主義革命である。

ブンド系の多くは、日米安保を日帝の外交政策と捉え、日帝と米帝の関係を対等の同盟と捉え、米帝を単なる反革命とだけ捉え、日米安保が日本の国家権力、日帝と米帝の連合支配体制であり、日帝が一定程度米帝に従属しており、米帝が部分的に占領を継続していることをあいまいにしている。また、米帝開放が日本革命の任務であることは認めているが、それが民族解放であることは認めていない。

☆ 第五章 正規の攻囲を組織し、革命戦争を準備しよう！

第一節 武装して闘う非合法のマルクス

・レーニン主義党の建設

急進民主主義であったブンドは、レーニンが示した型の党では武装闘争は聞えない、軍事組織は建設できないとした。そして、党の基本組織に軍事組織を付け加える二元的な組織路線を取った。こうして、一方では、合法組織である党の基本組織を基盤として、経済主義、合法主義が鈍化し、政治的宣伝・扇動を遂行するが、その内容を経済闘争・民主主義闘争に狭め、武装闘争を放棄した。他方では、軍事組織を基盤として、テロリズム・戦闘主義が鈍化し、政治的宣伝・扇動そのものを放棄するので武装闘争を闘うが、それは、資本主義とブルジョア階級独裁に対する憤激にとどまった。

レーニンが示した型の党で武装闘争を闘い、軍事組織を建設することはできる。レーニンが『なにをなすべきか？』で提起している型の党、つまり、全国政治新聞の発行による政治的宣伝・扇動を遂行する所の、職業革命家の組織を中心とし、中央集権制を組織原則とする所の組織は「まさに革命の最大の『沈滞』の時期に党の名誉と威信と継続性を救うことにはじまって、全人民の武装蜂起を準備し、指定し、実行することにはじまるまでの、あらゆる事態にたいする用意をもった組織」である。この「あらゆる事態」の中には、武装闘争も含まれているのである。

社会主義革命においては、革命戦争が発展し、社会主義統一戦線の機関として赤軍が建設されるまでは、つまり、革命戦争の初頭においては、マルクス・レーニン主義党そのものが武装闘争を闘わなければならない。党の基本組織そのものを非合法軍事組織として、武装して闘う非合法組織として、建設しなければならない。党の基本組織が、社会主義革命・プロレタリア階級独裁・暴力革命を内容とする政治的宣伝・扇動を遂行し、同時に武装闘争を闘わなければならない。一元的な組織路線を取らなければならない。レーニンが『一同志へ与える手続』で示している型の党を建設しなければならない。指導機関である中央委員会と地方委員会をできるだけ少数精鋭で構成し、ここにいるだけ党の指導を中央集権化し、その下に地区グループ、工場内下級委員会という執行受任機関と運動全体に奉仕する各種の特殊なグループを形成し、ここにいるだけ多数を配置し、できるだけ党に対する責任を地方分散化しなければならない。そして、この執行受任機関・特に地区グループを軍事的にも武装させ、中央委員会と地方委員会は軍事指導も行わなければならない。

第二節 正規の攻囲と持久戦

我々の当面する戦術は、正規の攻囲であり、革命戦争の準備であ

る。つまり、第一に、職業革命家の組織を中心とし、中央集権制を組織原則として、マルクス・レーニン主義党を建設し、社会主義革命・プロレタリア階級独裁・暴力革命を内容とする政治的宣伝・扇動を遂行しなければならない。「正規の攻囲」(レーニンである。これが基礎である。そうすれば、日帝はブルジョア階級独裁をファシズム化し、反革命の弾圧・戦争に出でくる。これに対して、マルクス・レーニン主義党は、受動的・消極的ではなく、積極的・能動的に対応し、プロレタリア階級独裁のための革命戦争を開始しなければならない。つまり、第二に、党組織を武装して闘う非合法組織に改組し、武装闘争を闘わなければならない。防禦の中の攻勢としてゲリラ戦を開始し、戦略的に、防禦から対峙を経て、攻勢へ進み、武装蜂起を実現しなければならない。「持久戦」(毛沢東)である。

ここからして、マルクス・レーニン主義の第三ブンド結成に際しては、①社会主義革命・プロレタリア階級独裁・暴力革命を内容とする政治的宣伝・扇動と職業革命家の組織中心・中央集権制での一致で統一し、団結すべきである。そして、②武装闘争と非合法武装組織については、徐々に不一致を克服し、一致を獲得していくべきである。それが可能である。これが、我々の結論である。

(p16からのつづき)

現した「革命的民主主義的国家」つまりプロレタリア階級と農民の連合独裁に変えることを提起している。しかし、我々の場合は、国家独占資本主義の国家を社会主義革命のプロレタリア階級独裁に変えるのである。そうすれば社会主義である。

国家独占資本主義にあっては、ブルジョア階級独裁の国家権力が生産手段を握り、経済を統制し「労働者には(そしていくぶん農民にも)軍事的苦役を、銀行や資本家に楽園を、(レーニン同)作り出しているが、この国家権力を打倒し、プロレタリア階級独裁の国家権力に変えるのである。ブルジョア階級が握り、動かしている軍隊、警察、官僚機構を粉砕し、全人民の武装を実現し、武装した人民から成る国家権力が生産手段を握り、経済を統制するのである。そうしたら社会主義である。

ファシズムの下の国家独占資本主義は、生産の社会化を高度に実現して社会主義の物質的準備となる(これは絶対主義の下での集中的封建制が、資本主義を準備したのと同じである。)しかし社会主義は、ブルジョア国家の下では、形成されずプロレタリア階級独裁の下で初めて形成される。だから暴力革命、プロレタリア階級独裁、これが社会主義へ前進する具体的な対策である。反合理化とか賃上げとかの労働者階級の経済闘争に対しては、実力闘争だけではなく、暴力革命、プロレタリア階級独裁を方針として提起しなければならないのである。

高原保釈金カンパの送り先

(1) 振り込み先ー横浜銀行

横浜駅前支店 38315191476

高原浩之

(2) 郵送ー横浜市中央郵便局私書箱132号

井上和美

保釈金高額化攻撃（五〇〇万）を強力カンパで粉碎せよ！

労働者、学生、同志友人諸君、救援戦線の諸君。

い詰めよ！

つめてい。

高原氏の保釈が目前に迫ってきた。（高原氏と同じく、よど号ハイジャック斗争で起訴され超長期拘留されていた、塩見氏は二月十五日保釈金六百万で地裁から保釈を勝ち取っている。）

高原氏は、よど号ハイジャック斗争で七〇年六月に不当にも「共同共謀正犯」として逮捕されて以降、七年に及ぶ獄中斗争を断固として闘いながら、ブント・赤軍派を総括し、プロレタリア階級独裁・社会主義革命の旗を一層、高々と掲げ非転向の闘いを貫き通してきた。この闘いに恐怖した、地裁・検事は繰り返して見事に渡る保釈要求を、非転向を唯一の根拠として拒否し続けてきた。それどころか、極右、ファシスト裁判長、ミノ原を使って、超長期拘留のまま早期決審、長期投獄を狙ってきた。我々はこの地裁・検事の策動を完全に粉碎せねばならないのだ。

しかも今日絶好のチャンス我々を手にしている。高原氏の非転向の粘り強い闘いと、わが支援委及び、多くの友人の支援の闘いが着実に前進し、地裁・検事を追いつめてきた。その結果、保釈を認めざるえない状況に彼らは立されているのだ。これは公判斗争の輝しい成果でもある。そして今、より一層、全重心をかけて力で押せば保釈をもぎとることが確実に出来るはずだ。

この保釈斗争の最大の山場に何があっても勝利せねばならない、そのために心から次のこと訴える。

第一は、保釈金の高額化（約五〇〇万）攻撃を打ち破る闘いである。地裁・検事は必ず非転向の闘いに対する報復として、法外な保釈金を要求してくる。しかも、高原氏をこの高額化攻撃で経済的に疲弊させ、一切の政治活動から分離せんとしているのだ。我々支援委は全力を上げ、全てを投入して保釈金のカンパ斗争に出征している。しかし、今だ十分な状態ではない。全国の労働者、学生、救援戦線の皆さんの強力なカンパを要請する。

第二は公判への結集である。三月二三日、四月一日は、よど号公判の最も注目すべき天王山である。二月十五日公判で明らかとなった、「共同共謀正犯」のデッチ上げの事実が塩見氏の証人尋問を通じて暴露され、その結果、共謀問題をめぐる検事側のデッチ上げの一角が確実に粉砕されたのである。更によど号ハイジャックで起訴されて、転向した前田証言のねつ造性が暴露され、前田氏に対する、詭計、営利誘導と云う不当な取調べの事態が明らかにされたのである。したがって次回、次々回公判は地裁・検事とのこの、共謀問題をめぐる全面的な対決の場となるであろう。3/23、4/11日公判に全力結集を呼びかける。

高原氏「被告団」とわが支援委は、公判に於いて三点の対決を鮮明に突き出し、斗争のヘゲモニーをしっかりと握りしめている。これらの対決点は、よど号ハイジャック斗争の総括を、マルクス・レーニン主義を導きの糸として正しくやり切ることで通じて獲得した我々の公判斗争の方針である。

第一の対決は「共謀問題」をめぐり、地裁・検事との闘いである。検事はよど号ハイジャック斗争が塩見氏逮捕の時点で具体的な方針として赤軍派によって決定されていたとして塩見氏逮捕後、高原氏がその方針を継承してハイジャックを実行したとして二人を「共同共謀・共同正犯」として起訴し7年に及ぶ超長期拘留弾圧を課した訳である。そして、それを立証する手段として、開催されてもいない架空の会議をデッチ上げ、共謀会議として更にあらゆる不当な取調べを駆使して虚偽の自供をねつ造したのである。それは、「ハイジャックが赤軍派の斗争であり、高原氏塩見氏などが同一組織の構成員だからデッチ上げで逮捕しようが、起訴しようが構わない」と云ったものである。革命組織に対する組織解体攻撃以外の何ものでもなかったのだ。そしてこの法的根拠として「共同共謀正犯」論が持ち出されたのである。

そもそも、この「共同共謀正犯」の規定は現行刑法にはない。ただ「実行犯」の「共同正犯」しか規定していない、これを判例によって拡大解釈し、革命派に対する組織解体・ファシズム弾圧の法的根拠にしているにすぎないのである。したがって、逮捕・起訴自体からして違法なのである。一言で云えば、よど号ハイジャック斗争に対する、ブルジョア階級の報復以外の何ものでもないと言言することが出来るのだ。

今日ブルジョア階級はこの判例にすぎなかった「共同共謀正犯」を刑法改悪草案によって成文化せんとしている。したがってこの対決に勝利することは刑法改悪の先取りと闘うと云うことでもあり決定的な闘いであるのだ。

第二の対決は金浦空港問題である。検事は、よど号を制圧し、乗客・乗務員を監視したのが犯罪であり、よど号ハイジャックの始めから終りまでが赤軍派の責任であるとしている。そして地裁・検事は公判でこのことを「証明」し高原氏塩見氏を12年以上の長期実刑攻撃長期投獄せんと狙っている。よど号を金浦空港に着陸させ、しかも三日もの長期に渡って釘付けにしたのは百パーセント、日米「韓」の反革命体制でありその軍隊などである。検事は、よど号ハイジャック斗争が暴露した、この日米「韓」の反革命体制がこれ以上日朝人民の前にさらけ出されるのを必死にならざるに阻止し切り抜けるために一切の責任を赤軍派に転化してきたのである。しかしこの対決も、乗客・乗務員が証人として出廷することを通じて勝利的に地裁・検事を追い

第三の対決は、当然保釈をめぐる闘いである。これは前述したように、保釈を哀訴や転向でやるのではなく、非転向でプロ独・社会主義を堅持し闘われていることからして、保釈獲得斗争を大衆的政治戦として、徹底的に全力で斗えば困難は多いが必ず勝利すること出来るのだ。

よど号ハイジャック公判斗争の勝利の要は、その正しい総括である。

我々は一貫して公判斗争を通じて、日米「韓」の反革命体制を暴露し、南朝鮮人民の反米・反日・朴打倒斗争を支持する立場を堅持してきた。それは今日、日米帝の朴政権を手先とした、朝鮮侵略反革命戦争に反対し対決する斗争として発展してきた。それはよど号ハイジャック斗争の総括を赤軍派の斗争として総括し、その中に孕まれていた、赤軍派の思想・政治路線をも総括の対象とすることである。具体的には赤軍派の旧路線の急進民主主義を合理化することなく、はっきりと清算し切ることである。日本人民の革命的能力を信頼せず、朝鮮人民を日本革命に利用しようとした誤りを積極的に自己批判すると云うことでもあるのだ。

こうして、現在我々は、よど号ハイジャック斗争の総括を深める一方、赤軍派・ブントの思想的・政治的総括とこれを結合して公判斗争をプロ独・社会主義が天皇制・ファシズムをかめぐる、革命と反革命の一個の戦場として練り上げている。

ブント・赤軍派を正しく総括し、急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブントを建設しよう。今日、日帝の支配ブルジョア階級独裁は、自民党政府の危機議会制ブルジョア民主主義の危機が進み、統治形態の天皇制・ファシズムの転換・反動化が始まっている。朝鮮革命の爆発が不可避となり米帝・日帝の朝鮮侵略反革命戦争が不可避であることが、一層これを促進しているのだ。

これに対して人民は、朝鮮侵略反革命戦争と対決する斗争、反動化に反対し、天皇制・ファシズムに反対する民主主義斗争、国家独占資本主義の搾取・収奪・抑圧の強化に反対する経済斗争を三大水路として大衆斗争を爆発させつつある。この情勢の只中に、これらの一切の闘いを統轄し天皇制・ファシズムと闘い、プロ独・社会主義革命を勝利に導くマルクス・レーニン主義党を打ち建てねばならない。この党の創建は我々の総括からして、ブントの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブントを結成することから始めねばならないのだ。そして、我々はこの闘いをすでに開始している。我々のあらゆる闘いはこの一点に集約されるし、当然公判斗争もこの闘いと結合して闘われねばならないし、すでに断固としてこの道を歩みつつづけているのだ。

公判斗争の三大対決に勝利し、地裁・検事を更に追

○高原氏の保釈金斗争に結集せよ。

○保釈金の高額化攻撃を五〇〇万カンパで粉碎しよう。

○三月二十三日公判に結集せよ。

共産主義と労働運動を結合せよ！

一九七四年～七五年にわたって日本経済は戦後最大の本格的な不況にみまわれた。この不況は循環的過剰生産の世界恐慌であると同時に不況下であるにもかかわらず物価が高率で上昇するという「スタグフレーション」という特徴を持っていた。即ち不況の矛盾を労働者に転嫁する傾向が極めて強いものとして表われたのである。我々は七四～七五の不況の底から、景気の「中だるみ」といわれる七六～七七年の資本の動向と労働者攻撃の質を暴露し、労働者階級の任務を明らかにしていかなければならない。

1. 低成長下の日本経済と天皇制ファシズム的統治形態の転換

春斗＝賃斗といわれるように、一九五五年の八単産共斗以来、二十有余年に渡って日本の労働運動は、「春斗」という賃金斗争の下にその基本的機能を固定化させてきた。それは、その間のいわゆる「高度成長」下において資本の高利潤の配分でありつくかどうかという、いわば配分斗争であった。こうした五五型労働運動の中では、労働者階級の歴史的任務である、賃金奴隷制の廃絶、資本主義生産関係の廃絶という任務は疎外され、修正主義、社会帝国主義の温床と化してしまっているのである。

しかし、こうした春斗方式は七五・七六の政府＝資本家階級の賃金統制攻撃＝ガイドラインを突破しえなればかりか、それを下回る妥結として敗北は公然化したのであった。一九六六年から七三年までの八年間は、平均、年間約八%の実質賃上げを実現してきたのに対して、不況突入以後は、七四年一・六%、七五年が〇・一%というように実質賃上げはほとんどゼロになっているのである。ところが消費者物価の方は、容赦なく上昇を続け、七六年十二月を一〇〇として今年一月には一一五・五と上昇しており、更に公共料金の値上げ旋風がおそい、労働者階級の貧困、不安はますます増加しているのである。

このように日本経済は「上層も下層もはや今まで通りにはやっていけない」（レーニン）ような時代に突入していつているのである。それではどうするのか。我々はここで低成長下における大企業の強蓄積と中小企業の危機という現実を分析していかねければならない。東証一部企業を大企業とするならば、これらの企業収益は、不況の間も、七四年三ヶ月以来、四期連続減益のあと七五年九ヶ月を底として急速に立ち直り、七六年三ヶ月・九ヶ月と「予想を大幅に超えた」（エコノミスト）急上昇ぶりを示したのである。このような大企業における急激な利益の増大は「輸出増加」「在庫べらし」等の要因の他に①製品値上げによる価格効果として独占価格体系が再編・構築されたこと、②賃金について日経連ガイドラインをしき賃上げを抑制したこと、③臨時工、パート、季節工等を切り捨て、一時帰休や採用停止等によって人員削減を強行し資本の剰余価値率を飛躍的に高めたこと、④下請中小企業に対して注文を大幅に削減し、下請企業の窮乏につけて過酷な低単価を押しつけたこと等、総じて労働者への矛盾の転嫁と強搾取によっているのである。

こうした独占企業の強蓄積は中小企業の危機となつてあらわれる。中小企業の倒産をとってみても月間倒産件数一〇〇〇件以上というのが七五年九月以来一五ヶ月連続しており、史上最悪の記録を更新しているのである。日本の法人企業のうち資本金五〇〇〇万円未満の中小企業が九八・三%を占めており、日本の労働者の六二・四%が働いているという現実をみるならば、現在の日本の不況は文字通り一%のブルジョワジーに比べ九八%の人民大衆を苦境に陥らせているといえるのであろう。しかし我々は独占の矛盾のしわ寄せを中小零細企業が受けているからといって、奴らを労働者階級の同伴者とみることが断固として拒否しなければならぬ。奴らは独占資本のしわ寄せを労働者階級に転嫁し、自からの延命のために更に搾取と抑圧を強めているのである。奴らもまた打倒対象なのである。ブルジョア階級はそうした強蓄積、強搾取の構造を維持せんがために、資本主義的生産関係の反映である支配統治形態を転換せんとしている。即ち戦後民主主義の幻想と高度経済成長下に於けるブルジョア議会制民主主義的統治形態から、官僚・警察・軍隊を前面に押し出した天皇制ファシズム的統治形態への転換である。それは戦参五五年体制といわれる独占資本の政治代理人である自民党支配体制が動揺し危機に直面している現在、ブルジョワ独裁の暴力装置である警察軍隊を前面に押し出し、ブルジョワ独裁の行政代

理人である官僚を掌握することによって資本主義生産関係を維持せんとする攻撃なのである。

2. マルクス・レーニン主義の下、革命的労働運動を構築せよ！

1. 明らかにしたブルジョワジーの攻撃とその質の転換に対して労働者階級の側はどうか。「上層も下層もはや今までどおりではやっていけない」時代を「革命的状態」（レーニン）とするならばブルジョワジー階級は労働者階級からの強収奪とますます寄生性を深め、支配形態の転換として腐巧性を深め、ますます反革命抑圧攻撃を強化するという形でこの危機を乗り越えんとしている。こうしたブルジョワジーの攻撃の前で、総評民同は改良主義、修正主義にますます陥り、七七春斗においては帝国主義労働運動であるIMF・JO、同盟にすぎりつき、賃上げ基準を奴らに作ってもらおうとしているのである。五五体制＝春斗方式を何ら転換できない社共＝総評民同は、既にブルジョワジーの攻撃の前に屈服宣言をしているのである。

「上層も下層もはや今までどおりにはやっていけない」時代の中で資本の攻撃に何ら対応できないJO・同盟・総評等「左」の既成労働運動指導部から離反し、闘争を激化させ闘い抜いていける労働者は着実に増加し結束し始めている現実を我々ははっきりみとらなければならぬ。「このままではやっていけない」と自覚した官公労青年労働者や全金本山、全金田中機械の長期にわたる実力斗争、東京における中小・零細企業争議組合の結合、山谷、釜ヶ崎、寿町等寄せ場労働運動の闘い等既成労働運動指導部から離れた労働運動は増加し結束を強めている。しかし、これらの闘争を何か特別の闘いに意味付与し、戦術的、戦術的に闘うことのみを目的化した戦術左翼的な小ブル急進主義は批判されなければならぬし、また個別資本の闘いに抑えこみ、第三者機関をもって解決するという経済主義的限界も批判していかなければならぬ。

労働者階級の経済的隷属からの解放が、諸民主主義斗争や個別斗争の延長上の闘いではなく、ブルジョワ階級独裁がプロレタリア階級独裁かをめぐる問題であり、この間の帝国主義の危機と延命、強搾取に対して激発するプロレタリア階級の斗争を共産主義と結合させ、プロレタリア階級独裁の下で社会主義の国家所有とするために闘う」更に「プロレタリアートの社会革命は、生産および流通の手段の私的所有を社会所有に代え、社会の全成員の福祉と全面的発展とを保障するために社会的生産過程の計画的組織化を実施することによって、諸階級への社会の分裂をなくし、こうして抑圧されている人類全体を解放するであろう。なぜなら、それは社会の一部分による他の部分の搾取のあらゆる形態をおわらせるからである」と主張している。

3. 共産主義と労働運動を結合し、今春期斗争に勝利しよう！

マルクス・レーニン主義に基づくプロレタリア社会主義革命の路線とは共産主義と労働運動の結合のことである。即ち、プロレタリア階級がブルジョワ階級独裁を打倒し、プロレタリア階級の権力を樹立することである。我々は綱領草案でこう主張している。「党はブルジョワ階級が私有し独占する生産手段および流通手段を収奪・没収し、プロレタリア階級独裁の下で社会主義の国家所有とするために闘う」更に「プロレタリアートの社会革命は、生産および流通の手段の私的所有を社会所有に代え、社会の全成員の福祉と全面的発展とを保障するために社会的生産過程の計画的組織化を実施することによって、諸階級への社会の分裂をなくし、こうして抑圧されている人類全体を解放するであろう。なぜなら、それは社会の一部分による他の部分の搾取のあらゆる形態をおわらせるからである」と主張している。

こうした我々の綱領的立脚点を踏まえ、資本との協調路線を進んでいく同盟、JO等の帝国主義労働運動を打倒し、革命的労働運動を構築していかなければならない。現在、産別の枠を突破し地域共闘あるいは狭山斗争や三里塚斗争に連帯し闘争労働戦線が広汎に構築されつつあるが、我々はそうした運動を過大に意味付与してソヴェト規定をもって資本主義下における二重権力を夢想する部分を断固として批判し抜いていかなければならない。問題は資本主義生産関係を粉碎し、共産主義生産関係を樹立することであり、共産主義と労働運動を結合するマルクス・レーニン主義の建設であり、プロレタリア社会主義革命に貫かれた革命的労働運動の構築である。

我々は綱領草案獲得をもってマルクス・レーニン主義建設に責任ある第一歩を踏み出した地平をもって革命的労働運動建設に前進していくであろう。現在の個別資本に反対する斗争を総資本＝権力斗争に押し上げていくのはマルクス・レーニン主義党に領導された共産主義と労働運動の結合に全てがかかっているのである。

戦争と革命の時代」に際するメモ

——「世界革命論集」をめぐって——

山 県 直

我々の情勢認識と路線を示す、と同時にブント系を統合するための9点の論点を述べます。

(1) 革命が主を傾向ではなく、革命の要素と同時に、戦争の要素も増大し、米ソの第三次帝国主義世界大戦は不可避である。(2) 日帝の朝鮮侵略反革命戦争は不可避であるが、この将来のことだけを見るのではなく、現在の日帝の朝鮮侵略反革命の政治も見なければならぬ。(3) 朝鮮民主主義人民共和国の自主的平和的統一の方針は正しい。これに反対し「平和的」を削ぎ、「自主的統一」だけにするのは誤りである。南朝鮮の革命は「民族解放・社会主義革命」ではなく、民族民主主義革命である。何よりも南朝鮮のプロレタリア階級、統一革命党と連帯しなければならない。(4) 朝鮮侵略反革命戦争と米ソの第三次大戦に反対するだけの急進民主主義ではだめであり、この二つの帝国主義戦争から抜け出す権力奪取。日帝打倒・プロ独・社会主義革命の内乱、革命戦争を追求しなければならない。(5) 「革命的情勢」「全国民危機」が始まっているのであるから、日帝のブルジョア階級独裁について、議会制ブルジョア民主主義の危機を見るだけでなく、天皇制ファシズムの反動化も見なければならぬ。(6) 天皇制ファシズムだけが官僚的、警察的、軍事的独裁であると見て議会制ブルジョア民主主義を美化してはいけない。ブルジョア階級独裁である以上、議会制ブルジョア民主主義も官僚的、警察的、軍事的独裁であり、天皇制ファシズムはそれが強化されるのである。(7) 「自民党政府打倒」のスローガンは国家権力の問題を政府の問題に切り縮めており議会主義に通じる。暴力革命を準備するスローガンは「軍隊、警察、官僚機構の粉碎」である。(8) ブルジョア階級独裁の打倒、既存の国家権力、軍隊、警察、官僚機構の粉碎を宣伝、扇動するだけの急進民主主義ではだめであり、取って代るプロレタリア階級独裁の樹立、全人民の武装を実現し、これで新しい国家権力を構成することを宣伝、扇動しなければならない。(9) 「国家独占資本主義から社会主義へ」のスローガンを掲げなければならない。この9点ほどが論点でしょう。

(1) について

「だから、『国際帝国主義的』あるいは『超帝国主義的』同盟はイギリスの坊主どもやドイツの『マルクス主義者』カウッキの月なみの小市民的幻想のなかではなく、資本主義の現実のなかでは、そういう同盟がどのような形で結ばれようとも、すなわち、ある帝国主義的連合に対する他の帝国主義的連合という形であろうと、あるいはすべての帝国主義列強の全般的同盟という形であろうと、不可避的に、戦争と戦争のあいだの『息ぬき』にすぎない。平和的な同盟は戦争を準備するが、それはまた戦争から生まれるのであって、両者は、相互に制約しながら、世界経済と世界政治の帝国主義的な関連と相互関係という同一の地盤から生じる平和的斗争と非平和的斗争との形態の交替を生み出す」(レーニン『帝国主義論』)

ソ連は現代修正主義によってブルジョア階級独裁、資本主義へ変質した。口先だけでは「社会主義」でも実は帝国主義である。ソ連社会帝国主義は、米帝に取って代って新たに世界支配権を確立しようとして、第三次世界再分割戦、覇権争奪を推し進めている。ソ連社帝と米帝の関係では、結託、協調は一時的相対的であり、対立、斗争こそが長期的、絶対的である。帝国主義相互間の矛盾は、帝国主義が社会主義革命によって消滅されず、帝国主義である限り、必ず激化し、戦争へ発展、転化する。

インドシナの民族解放斗争が勝利し、老朽の米帝が後退し、新興のソ連社帝が台頭し、今や、革命が主を傾向でなくなり、革命の要素と戦争の要素が共に増大している。第三世界の民族解放斗争が拡大し、西欧、日本の社会主義革命が始まるのが不可避であるが、米ソでの社会主義革命が当面ありえないので、米ソの第三次帝国主義世界大戦も不可避である。第三世界の民族解放斗争の拡大、西欧、

日本の社会主義革命の開始に対して、米帝が西欧帝、日帝と共に侵略反革命戦争にのめり込むであろう。ソ連社帝が、この民族解放斗争、社会主義革命を「支援する」という口実で、利用し、変質させ支配下に組み込むことを策動しつつ西欧、日本に攻め込み、米帝に対する覇権争奪を戦争へ発展、転化させるであろう。こうして、米ソの第三次大戦が始まるだろう。

だから、米ソ二大帝帝国主義に反対し、覇権主義に反対しなければならぬ。第三世界の民族解放斗争を拡大し、西欧、日本の社会主義革命を開始し、米ソの第三次大戦に備えなければならない。これが当面する世界革命戦略である。

ブント系の多くは、革命が主を傾向と見、ソ連社帝と米帝の関係について、結託、協調が基本的だとし、米ソの第三次帝国主義世界大戦の不可避性を否定している。これはカウッキの超帝国主義論であり、当面する世界革命戦略を米帝に対する斗争だけに一面化し、ソ連社帝に対して斗争を放棄し、免罪することになる。

以上のような主張になるでしょう。米ソの第三次大戦では、ソ連社帝が西欧、日本に攻め込む以外にありえないのです。では、その時どうするか？これに対する我々の答はできていますが、いまそれを明らかにする必要はありません。今は、米ソの第三次帝国主義世界大戦が不可避であること、第三世界の民族解放斗争の拡大と西欧、日本の社会主義革命の開始も同時に不可避であるが、しかし、第三世界と西欧、日本の革命がいくら爆発しても、米ソの第三次大戦を防ぐことはできないこと、むしろ、第三世界と西欧、日本の革命に対する米帝の侵略反革命戦争がソ連社帝の介入を招き、第三次大戦の引き金となること、このことをはっきりさせておけばいいのです。

(2) について

ブント系の多くは「平和的」を削除して「自主的統一」だけにし、朝鮮労働党の自主的平和的統一の方針に暗に反対しているが、これは誤りである。南朝鮮の革命を平和的に行なう方針と誤解しているのである。朝鮮労働党の自主的平和的統一の方針は全く革命的で正しい。自主的統一とは、外国の勢力、帝国主義を排除して、朝鮮の南北統一を朝鮮民族が自主的に実現することである。平和的統一とは、南朝鮮の革命を平和的に行なうことでなく、朝鮮の南北統一を平和的に行なうことであり、その前提である南朝鮮の民族民主革命は暴力革命で行なうのである。ベトナムと全く同じである。

ブント系の多くは南朝鮮の革命を「民族解放・社会主義革命」としている。これは反封建の民主主義革命、農民の土地革命を否定しており、民族解放をその一種とする民主主義革命、つまりブルジョア革命と社会主義革命、つまりプロレタリア革命とを混同しており、特に、民族解放や民主主義革命でプロレタリア階級が目指すプロレタリア階級と農民の連合独裁、人民連合独裁、つまり、民主主義的独裁と社会主義革命のプロレタリア階級独裁つまり社会主義的独裁とを混同している。トロツキズムのニセの誤った「永続革命論」である。

南朝鮮では、米日両帝国主義と自国の買弁ブルジョア階級及び封建地主階級に対する民族解放・民主主義革命に直面しているのである。(朴政権は、買弁ブルジョア階級と封建地主階級を基盤とした米日両帝国主義のカイライ政権である。)社会主義革命ではない。

この南朝鮮の民族民主革命は朝鮮の南北統一の前提である。

マルクス・レーニン主義の観点、立場からすれば、反米反日朴打倒(反買弁反封建)の民族民主革命において、プロレタリア階級は農民と同盟し、この労働同盟を主力として、さらに、都市小ブルジョア階級、一定の程度では農民ブルジョア階級を結集して民族民主統一戦線を結成し、これを指導して、暴力革命を遂行し、民主主義

と最小限綱領を履行する人民連合独裁を樹立し、革命を徹底して遂行しなければならぬ。これが第一段階である。そして、次に、この権力を、社会主義と最大限綱領を履行するプロレタリア階級独裁へ転化し、第二段階の連統的に社会主義革命へ進まなければならない。こうして朝鮮の南北統一が実現されるのである。ペトナムでは南の革命が反米・チ・打倒（反買弁・反封建）の民族民主革命から社会主義革命へ発展して南北統一が実現された。朝鮮も同じである。南朝鮮プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党である統一革命党はこのような戦略・路線である。

大体、以上のような主張になります。なお、何よりも南朝鮮のプロレタリア階級、統一革命党と連帯すべきであるという主張はやめられないのは革共同中核派であり、ここに反スタ主義の実質が現われています。それから、南朝鮮では買弁資本主義が封建制をなし崩しにして発展しつつあるので勿論、反封建の農民の土地革命の任務はあるが、民主主義の任務の大きな比重が、資本主義の下でのプロレタリア階級の民主主義的権利の実現へ移って、このことは、統一革命党の綱領が示しているはずだ。ただ、ここでは一般的な後進国、植民地国の革命の問題として反封建民主主義革命を言っているのです。ブンド系の多くの「民族解放社会主義革命」も後進国、植民地国の一般的な革命の問題として言われているからです。

(3) について

ブンド系の多くは、将来の日帝の朝鮮侵略反革命戦争を見ているだけである。戦争は、特殊な手段による政治の継続であり、日帝は現在、朝鮮侵略反革命の政治を行っておりこれが将来、不可避に朝鮮侵略反革命戦争に発展するのである。だから、日帝の現在の朝鮮侵略反革命の政治も見なければならぬ。

南朝鮮の朴政権は、買弁ブルジョア階級と封建地主階級を地盤とした米日両帝国主義のカイライ政権である。日本帝国主義は、朴政権を先として南朝鮮を資本輸出、商品輸出、安価な労働力のための最大の市場、最大の植民地とし、一般的に最大の勢力圏、生命線としている。そして、朝鮮の南北分断体制を固定化し、朝鮮民主主義人民共和国と敵対している。こうして、朝鮮侵略反革命の政治を現在、行なっている。南朝鮮の反米反日朴打倒の民族民主革命の爆発は不可避である。現在、学生、都市小ブルジョア階級と農民が前面に出て暴力革命、革命戦争へ発展する。これに対して、日帝は、現在でも米日「韓」軍事体制を強化し、朴政権を先として、南朝鮮人民に対する反革命軍事独裁支配を強化しているが、必ず米帝と連合して南での反革命戦争と北に対する侵略戦争を開始する。日帝の朝鮮侵略反革命戦争は不可避である。

米帝国主義は、現在、朝鮮人民の民族解放斗争に対する反革命は、現地カイライ政権と日帝に委ね、自分は欧州を主戦場とするソ連社帝との覇権争奪に集中し、将来不可避である米ソの第三次帝国主義世界大戦での主導権を確立しようとしている。だがこれは主観的な願望にすぎない。米帝にとって、南朝鮮は、アジアで民族解放斗争に対して、植民地支配体制を維持するための、またソ連社帝に対してアジアにおける覇権を維持し、日本を西欧につぐ重要な勢力圏として維持するための軍事基地である。放棄することはできない。と同時に、日帝は最大の植民地、生命線である南朝鮮を維持するためには、米帝が頼りにならなければソ連社帝に頼らうとしているのである。米帝は日本をソ連社帝に奪われたいためにも、南朝鮮を放棄することはできない。かくて、南朝鮮の革命の爆発に対して日帝が主導し、米帝を引っ張り込んで、米帝、日帝が朝鮮侵略反革命戦争にのめり込むことは不可避である。

こうした米帝、日帝の朝鮮侵略反革命戦争は米ソの第三次帝国主義世界大戦の引き金となるであろう。ソ連社帝は、「朝鮮人民の民族解放斗争支援」を口実に、主導権を持って、米帝に対する覇権争奪、勢力圏再分割の戦争を開始し、日本に攻め込むであろう。こうして、今度は、米帝が主導し、日帝を引っ張り込んで米ソの第三次帝国主義世界大戦にのめり込むであろう。

(4) について

米帝、日帝の朝鮮侵略反革命戦争と米ソの第三次帝国主義世界大戦に反対するだけの急進民主主義ではだめである。この二つの帝国

主義戦争から抜け出す唯一の道はプロレタリア階級の権力奪取、日帝打倒・プロ独、社会主義革命の内乱、内戦、革命戦争に突き進まなければならない。

「資本の権力を倒さなければ、国家権力が別の階級、すなわちプロレタリアートに移らなければ、帝国主義戦争から抜け出すことはできない」（レーニン）「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」

米・日本とソ連が帝国主義であり、社会帝国主義である限り、日帝が米帝を引っ張り込んでの朝鮮侵略反革命戦争とソ連社帝が仕掛け、米帝が応じ日帝を引っ張りこんでの第三次帝国主義世界大戦は共に不可避である。この二つの帝国主義戦争から日本が抜け出すことのできる唯一の道は、ブルジョア階級独裁の国家権力を打倒すること、国家権力をブルジョア階級から奪ってプロレタリア階級が握ること、統治階級をプロレタリア階級に変えること、日本が帝国主義でなくなり、社会主義となることである。日帝打倒・プロ独、社会主義革命だけである。このための内乱、内戦、革命戦争だけである。プロレタリア階級はこの唯一の道を突き進まなければならない。

ブンド系の多くは「日帝の朝鮮侵略反革命戦争を内乱、内戦へ」とか、「米ソの第三次帝国主義世界大戦の前段階での決戦」とかを主張している。これ自体は正しい。だがしかし、「内乱、内戦」の「決戦」の政治内容、つまり、ブルジョア階級独裁の打倒、プロレタリア階級の権力奪取、統治階級の交替、プロ独、社会主義革命と具体的に提起していない。帝国主義戦争から抜け出す具体的な方策を提起していない。一般的に「内乱、内戦」「決戦」を叫んでいるだけなので、日帝の朝鮮侵略反革命戦争と米ソの第三次帝国主義世界大戦に反対する反戦斗争、つまり民主主義斗争を激しく闘うだけの急進民主主義となっているのである。

(3)(4)は、大体以上のような主張になります。米ソの第三次大戦が始まりソ連社帝が日本に攻め込んだらどうするのか？これに対する我々の答は用意されていますが、今は、それを出すのではなく、朝鮮侵略反革命戦争が米ソの第三次大戦の引き金となること、米ソの第三次大戦ではソ連社帝が日本へ攻め込むこと、より正確には、アジアでは米ソの第三次大戦はソ連社帝が日本へ攻め込むことが中心であること、この問題提起をするだけにすべきです。そして朝鮮侵略反革命戦争に対しても、米ソの第三次大戦に対しても今は、日帝打倒、プロ独、社会主義革命が唯一の路線であり、これをとことん推進することを明確にしておくべきです。

(5) について

米帝国主義との連合支配である日米安保体制の下での日本帝国主義の支配ブルジョア階級独裁の統治形態は、今まで、象徴天皇制の下での議会制ブルジョア民主主義であった。議会在が農民小ブルジョア階級を結束した公然たるブルジョア政党である自民党とプロレタリア階級をだまして隠然たるブルジョア政党である社会党を中心とした野党とで構成されていた。そして、ブルジョア階級は、議会で選出される自民党内閣を通じて執行権力を握り、動かし、独裁を実行していた。この基礎は、資本主義の高度成長であった。

しかし、今や、高度成長は破綻し、恐慌の後、長期の停滞が進行する中で、国家独占資本主義が強化され、その下で、人民に対する搾取（賃金統制）・収奪（赤字財政によるインフレ）、抑圧（産業と行政の合理化）が強化されているために、被抑圧階級の貧困と窮乏が普通以上に激化している。これに対して、労働運動が高揚し、人民の斗争が激発しつつある。国家独占資本の下での労働組合（公労協）に組織されている労働者の闘争は修正主義の社会党、総評民同と「共産党」の支配を突破しつつある。民間独占資本の下での労働組合における帝国主義的労働運動（民社党・同盟・JOC）の支配は揺ぎつつある。社外工、臨時工、中小零細企業の労働者の闘争も激発しつつある。被抑圧小少数民族、被差別部落民や農民、都市小ブルジョア階級も広範に闘争に決起しつつある。こうして、「大衆の活動力がいちじるしくたかま」っている。これを基礎として、農民小ブルジョア階級が離反し、自民党の議会での過半数が不可能になりつつあり、また、社会党・「共産党」が、プロレタリア階級を議会にすぎとめることが不可能になりつつある。

こうして、日本帝国主義、ブルジョア階級は今まで通り支配して行くことができなくなりつつある。これに加えて、朝鮮人民の民族解放闘争に対する朝鮮侵略反革命の強化、戦争のためにも、今まで通りではやっていけないのである。ここからして、日本帝国主義は、統治形態を天皇制ファシズムへ転換しつつある。ブルジョア階級は天皇制を前面化し、元首天皇制とし、軍隊、警察、官僚機構を肥大化し、議会から独立化、独自化させ、両者を結合し、天皇を通じて執行権力を握り、動かし、独裁を実行するようにしようとしている。そして、天皇制ファシズムを隠すイナジクの葉である議会政治については、保守本流の自民党を一方とし、保守傍流―新自由クラブ・社会党右派・公明党・民社党を他方とする二大政党制に再編し、農民・小ブルジョア階級をここに再結集し、社会党左派、「共産党」を包囲し、一層ブルジョア政党化し、それを通じて、プロレタリア階級を屈服させようとしている。

天皇制ファシズムは、次の諸点で把握することが出来る。①天皇制ファシズムの本質は、ブルジョア階級独裁である。②天皇制ファシズムの実体は、天皇を頂点とする軍隊・警察・官僚機構である。③天皇制ファシズムの基礎は、国家独占資本主義である。④天皇制ファシズムの別働隊が右翼・民間反革命である。⑤天皇制ファシズムが、ブルジョア階級の「軍事的支柱」(レーニン『帝国主義論』)であり、民社党、社会党、「共産党」などの社会帝国主義・修正主義が「社会的支柱」(同)である。⑥天皇制ファシズムは、権威主義・排外主義・差別主義で思想的に人民を屈服させ、分断支配する。⑦天皇制ファシズムは、外には、朝鮮侵略反革命戦争のための、内には、プロレタリア階級の社会主義革命に対する反革命のためのブルジョア階級独裁の統治形態である。

このブルジョア階級独裁の統治形態の議会制ブルジョア民主主義から天皇制ファシズムへの転化での対極では、人民が今まで通り支配されていくことを望まなくなり、次の三大水路を通して、つまり、①朝鮮侵略反革命に反対し、戦争に反対する反戦闘争。②反動化に反対し、天皇制ファシズムに反対する民主主義闘争、③国家独占資本主義の下での搾取、収奪、抑圧に反対する経済闘争、である。だが、我々は、次のようにレーニンが『第二インターナショナルの崩壊』で示した革命的情勢に対応するマルクス・レーニン主義の三大任務を遂行しなければならぬ。つまり、「革命的情勢が存在することを大衆のまえに知らせ、その広さと深さを説明し、プロレタリアートの革命的決意をよびさし、プロレタリアートをたすけて、革命的行動につらせ、この方向で活動するために革命的情勢に応じた組織をつくりだす」という任務がそれである。

任務の第一は、大衆闘争の三大水路に対応した革命的宣伝・扇動である。①反戦闘争の中に、朝鮮革命を支持する宣伝、扇動を持ち込まなければならぬ。朝鮮の自主的平和的統一闘争、南朝鮮の反米反日朴打倒の民族民主革命、在日朝鮮人の民族的権利のための闘争を支持することである。将来、共に不可避である。不正義の戦争・日帝の朝鮮侵略反革命戦争に反対し、正義の戦争、朝鮮人民の民族解放戦争を支持することである。②民主主義闘争の中に暴力革命、プロレタリア階級独裁の宣伝、扇動を持ち込まなければならない。天皇制ファシズムを打倒し、プロレタリア階級独裁を樹立することである。天皇を頂点とする軍隊、警察、官僚機構を粉碎し、全人民の武装を実現することである。③経済闘争の中に社会主義革命の宣伝、扇動を持ち込まなければならない。国家独占資本主義から社会主義へ進むことである。④で宣伝、扇動する暴力革命、プロレタリア階級独裁は、①に關しては、不正義の戦争、日帝の朝鮮侵略反革命戦争をなす唯一の方策であり、③に關しては、国家独占資本主義から社会主義へ進む具体的な方策である。

任務の第二は、革命闘争である。天皇制ファシズムの武装力をせん滅する武装闘争である。今すぐこれを闘うのではないが、近い将来闘うために今は準備するのである。要するに、マルクス・レーニン主義は、天皇制ファシズムの反革命に對して、受動的、消極的に對応するのではなく、能動的・消極的に對応し、プロレタリア階級独裁のための革命戦争をゲリラ戦から武装蜂起へと闘っていくのである。任務の第三は、革命的組織である。武装して闘う非合法党を建設することである。職業革命家の組織を中心とし、中央集権制を組織原則

として党を建設し、この党組織を一步一法、非合法組織へ転化していくのである。

①我々は、現在、レーニンが『第二インターナショナルの崩壊』で示した次のような「革命的情勢」が始まりつつあると見ている。「(1)支配階級にとって不変のかたちでは、その支配を維持することが不可能になること。『上層』のあれこれの危機、支配階級の政治の危機が亀裂をつくりだし、それに伴って被抑圧階級の不満と憤激が爆発すること、革命が到来するには通常、『下層』がこれまでどうりに生活することを『欲しない』といっただけでは足りない。さらに『上層』がこれまでどうりに生活することが『できなくなる』ということがある。 (2)被抑圧階級の貧困と窮乏が普通以上に激化すること。 (3)右の諸理由から、大衆の活動力がいちじるしくたかまること。大衆は『平和な』時期には、おとなしく搾取されるままになつていくが、嵐の時代には、危機の環境全体と『上層』そのものによつて、自主的な歴史的行動にひきいられる」。この①をレーニンは『共産主義の「左翼」「小児病」で、全国的な(搾取されるものにも、搾取するものにもかかわる)危機」と規定しているが、現在これが始まりつつあると我々は見ている。

(5)についてブンド系の一部は、「革命的情勢」「全国的危機」の始まりを認めつつも、日帝のブルジョア階級独裁の統治形態の転換を示していない。あるいは統治形態の転換は認めつつも、天皇制ファシズムへの転換を示していない。これは、ファシズムの実質、つまり、本質と実体は、ブルジョア階級独裁の国家権力、軍隊、官僚機構であることが分っていないからである。ファシズムを小ブルジョア階級の運動として登場し、国家権力を奪取するように理解しているからである。このため、天皇制の前面化と結合したブルジョア階級独裁の国家権力、軍隊、警察、官僚機構の肥大化という天皇制ファシズムを示せないのである。

レーニンは『国家と革命』の「第二章・国家と革命・1848-1851年の経験」の「二、革命の総括」でマルクスの『ルイボナパルトのブルームール18日』を引用しながら、ブルジョア階級独裁の国家権力の発生・発展・完成・強化を次のように示している。①「ブルジョア社会に特有な中央集権的国家権力は、絶対主義の没落期に生まれた。この国家権力にとってもっとも特徴的な制度が二つある。官僚制と常備軍である」。②「封建制度の没落以来、ヨーロッパが数多く経験したすべてのブルジョア革命をつらして、この官僚、軍事機関の発展・完成・強化がすすんでいる」。③「だがとくに帝国主義―銀行資本の時代、巨大な資本主義的独占の時代、独占資本主義が国家独占資本主義へ成長転化する時代―は、君主制の時代でも、もっとも自由な共和制の国々でも、プロレタリアートにたいする弾圧の強化と関連して、『国家機構』の異常な強化、その官僚、軍事機関の前代未聞の成長を示している」。

つまり、最後の封建制国家である絶対主義は、ブルジョア階級の台頭に対抗して、最大の領主である君主が、他の領主を没落させ、通常その下に分散していた軍隊、警察、官僚機構を自分の下に集中した中央集権的な国家権力である。しかし、これは貨幣経済を全国化し、商品経済のために統一した国内市場を形成することによって、資本の原始蓄積、封建制の没落、資本主義の形成を促進する結果をもたらしたのである。そして、ブルジョア革命によって、ブルジョア階級が国家権力を握り、プロレタリア階級に対抗して、中央集権的な軍隊、警察、官僚機構を発展させ、完成し、強化したのである。ブルジョア国家、ブルジョア階級独裁の統治形態は通常、ブルジョア民主主義であり、ブルジョア階級は議会で選出した内閣を通じて、軍隊、警察、官僚機構を動かす。しかし、ブルジョア革命の直後、進出してきたプロレタリア階級を抑圧するために執行権力を議会から独立させ、君主または大統領を通じて動かす。これがポナバルティズムである。こうして、資本主義の安定した発展が実現されればブルジョア民主主義となる。しかし、資本主義の帝国主義段階は、プロレタリア社会主義革命の前夜である。ここで、ブルジョア階級は、プロレタリア階級の社会主義革命に對する反革命のために、国家独占資本主義を経済的土台として、ブルジョア階級独裁の軍隊・警察・官僚機構を極度に肥大化させ、再び執行権力を議会から独立させ、君主または大統領を通じて動かす。これが、ファシ

ズムである。

このようなファシズムの実質、つまり、本質と実体は、ブルジョア階級独裁の国家権力・軍隊・警察・官僚機構であり、それが、プロレタリア階級の社会主義革命に対する反革命のために極度に肥大化するに際して、没落した小ブルジョア階級を動員するのである。決して、小ブルジョア階級の運動として登場して、国家権力をブルジョア階級から奪取して握るのではない。

そして、現在の日本の場合、天皇制がこのブルジョア階級独裁の国家権力の肥大化、それへの没落した小ブルジョア階級の動員のテコになるのであり、だから天皇制ファシズムなのである。

(6)について

ブントの一部は「天皇制ファシズム軍事独裁」などと規定し、ファシズムだけが、官僚的、警察的、軍事独裁であるかのように、ブルジョア民主主義はそうではないかのように見ている。これはブルジョア民主主義の美化である。

レーニンは『国家と革命』の「第一章、階級社会と国家」で、エングルスの『家族、私有財産と国家の起源』を引用しながら、次のように言っている。つまり、①国家は「階級対立の非和解性の産物であり」「階級支配の機関であり、一階級が他の階級を抑圧する機関であり」、②国家権力は「監獄等を意のままにする武装した人間の特殊な部隊」から成り、「常備軍と警察とは国家権力の主要な力の道具」であり、③国家は支配階級が「被抑圧階級を搾取する道具」である。結論として「ブルジョア国家の形態はさまざまであるが、その本質は一つである。これらの国家はみな、形態はどうであろうとも結局のところ、かならずブルジョア階級の独裁なのである。」

ブルジョア民主主義の本質も、ファシズムと同じく、ブルジョア階級独裁である。ファシズムだけではなくブルジョア民主主義においてもブルジョア階級が軍隊・警察、官僚機構を握り動かして独裁を実行している。ブルジョア民主主義とファシズムはブルジョア階級独裁の統治形態の違い、ブルジョア階級が国家権力を握り動かして独裁を実行する形式の違いである。そして同じように官僚的、警察的、軍事的独裁であるが、それが、ファシズムではブルジョア民主主義より強化されるのである。

ブルジョア民主主義は「資本主義の最良の政治的外被」(レーニン『国家と革命』)である、どういふことか？国家権力を握り、動かし、独裁を実行するに際して、ブルジョア階級が全体として、全成員が平等に参加できる唯一の形成が議会で内閣を選出し、内閣を通じて行なうブルジョア民主主義の形式である。ボナパルチズムやファシズムでは、このブルジョア階級にとっての民主主義が不可能なのである(これは封建国家で、領主階級が全体として全成員に平等に権力を握り、独裁に参加する形式は、個々の領主の下に権力を分散させた地方分権制であり、絶対主義ではこの領主階級にとっての民主主義が不可能なのと同じである)。だから現在、プロレタリア階級の社会主義革命に対する反革命のためにブルジョア階級独裁の統治形態が議会制ブルジョア民主主義から天皇制ファシズムへ転換しつつあるのに対して、ブルジョア階級の一分派である公明、民社、「共産」の野党がブルジョア階級独裁への平等な参加を要求して反対し、種々の政権構想を提起しているのである。このことをはっきり見抜かねばならぬ。

(7)について

ブント系の一部は「自民党政府打倒」のスローガンを国家権力の問題として提起している。これは国家権力の問題を政府の問題に切り縮めており議会主義に通じる。

レーニンは『国家と革命』の「第一章、階級社会と国家」で、次のように言っている。「ブルジョア国家がプロレタリア国家(プロレタリアートの独裁)と交替するのは『死滅』によつては不可能であり、それは通例、暴力革命によつてのみ可能である。」「第二章、国家と革命。一八四八―一八五一年の経験」の「革命の総括」で、マルクスの『ルイボナパルトのブリュメール18日』から「革命は執行権力を完成し、それを、そのもっとも純粋な表現につきつめ、それを孤立させ、それを唯一の標的として自分に対立させ、こうして自分の破壊力をことごとく執行権力に集中できるようにする」を引用しつつ、次のように言っている。「これまでも」(ブルジョア)

「革命はみな国家機構をいっそう完全なものにしたが」(プロレタリア革命では)「国家機構は粉碎し打ち砕かなければならないのだ」そして、「第三章、国家と革命 一八七一年のパリコミューンの経験。マルクスの分析」の「一、コミューン戦士の試みの英雄精神はどういう点にあるか？」で、マルクスの『フランスにおける内乱』から「労働者階級は、できあいの国家機構をそのまま奪い取って自身自身の目的のために動かすことはできない」を引用しつつ、「できあいの国家機構」を「粉碎し、打ち砕く」こと、「打ち砕き破壊する」ことがそれであると言っている。

プロレタリア階級は社会主義革命において暴力革命でブルジョア階級独裁の国家権力、ブルジョア階級が握り動かしている軍隊、警察、官僚機構を粉碎し、打ち砕き、破壊しなければならぬのである。「自民党政府打倒」は、ブルジョア階級独裁の国家権力、ブルジョア階級が握り、動かしている軍隊、警察、官僚機構はそのままにして、社「共」内閣を議会で選出する議会主義に通じるスローガンである。現在、ブルジョア階級を独裁の統治形態が天皇制ファシズムへ転換しつつあり、ブルジョア階級は天皇を通じて軍隊、警察、官僚機構を握り、動かし、独裁を実行するようにしようとしている。だから、暴力革命を準備するスローガンは「天皇を頂点とする軍隊、警察、官僚機構の粉碎」である。

(8)について

ブント系の一部は「官僚的、警察的、軍事的独裁の粉碎」のスローガンを掲げるだけで「全人民の武装」のスローガンを掲げている。これは、急進民主主義である。レーニンは『国家と革命』の「第三章、国家と革命。一八七一年のパリコミューンの経験、マルクスの分析」の「二、粉碎された国家機構をなにとりかえるのか？」でマルクスの『フランスにおける内乱』からの引用をしている。「コミューンの最初の命令は、常備軍を廃止し、それを武装した人民にとりかえることであつた」。社会主義革命では、プロレタリア階級、それと同盟した貧農半プロレタリア・それに指導される小商品生産の集団化を承認した中農半ブルジョアと都市小ブルジョア階級、これが人民である。暴力革命でブルジョア階級独裁の軍隊・警察・官僚機構を粉碎した後、それを武装した人民と取り替えるのである。プロレタリア階級独裁の国家権力を武装した人民で構成して樹立するのである。

急進民主主義は、社会主義革命を主観的決意、個人的闘争で実現しようとし、実際には資本主義に対する小ブルインテリゲンツアの憤激を代表するだけである。社会主義革命の原動力が労働者階級の階級闘争、プロレタリア階級独裁であることを理解しないのである。この反映、表現として、ブルジョア階級独裁の軍隊、警察、官僚機構の粉碎を提起するだけで、それに取って代る、その原動力であるプロレタリア階級独裁の全人民武装を提起しないのである。実際には、ブルジョア階級の官僚的、警察的、軍事独裁を粉碎することはできず、それに対する小ブルインテリゲンツアの憤激を代表するだけである。現在、ブルジョア階級独裁の統治形態が天皇制ファシズムへ転換しつつある。だから、暴力革命、プロレタリア階級独裁を表現する正しいスローガンは「天皇を頂点とする軍隊、警察、官僚機構の粉碎、全人民の武装」である。

(9)について

現在恐慌の後の長期の停滞の中で、国家独占資本主義の下での搾取、収奪、抑圧に反対する労働階級の経済闘争が爆発しつつある。これに対してブント系の多くは正しいスローガンを提起できていない。正しいスローガンは、「国家独占資本主義から社会主義へ前進せよ」である。

レーニンは、『さし迫る破局、それと如何に闘うか』で次のように言っている。「ほんとうに革命的、民主主義的な国家のもとでは、国家独占資本主義は不可避免的に、必然的に社会主義への一歩、いな数歩を意味する」「なぜなら社会主義は国家資本主義的独占からつぎの一歩をすすめたものにほかならないからである。」「国家独占資本主義が、社会主義のもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義とよばれる一段とのあいだには、どんな中間の段階もないような歴史の階段の一段であるからである。」「レーニンは、ここで国家独占資本主義の国家を、民主主義革命で出

(a10<u>u>)

現代修正主義のプロレタリア階級独裁放棄を批判す。

1. レーニン『プロレタリア革命と背教者カウツキー』の学習

現代修正主義、社会帝国主義者がブルジョア階級の手先として、あらゆる手段を駆使しながら労働者階級の内部に侵透せんとしている現在、共産主義者は、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線をもって奴らを摘発し放逐する任務がますます重要な課題となってきた。奴ら革命の裏切り者はある日突然生まれ出たものではなく、ブレハーフ、カウツキー、スターリン、フルンツェフ、等多くの先達を持っている。奴らに共通しているのは、背教者カウツキーが一貫して要求しているところの「内乱のない、独裁のない、平和な民主主義をもった、一言でいえば、革命ぬきの、はげしい闘争ぬきの、暴力ぬきの革命」(レーニン)、即ちブルジョワジーを擁護し、自からブルジョワジーに転化せんとするような路線なのである。

我々はレーニンの「プロレタリア革命と背教者カウツキー」を学習することによって、「マルクス主義を口さきで承認するが、じつさいはプロレタリアートの非革命的な『階級』闘争をみとめる自由主義的、ブルジョワ的学説への転化を示した第二インターナショナル最大の権威であるカウツキー」を徹底的に批判していかねばならない。「労働者階級は、この背教、無節操、日和見主義への追従、マルクス主義の理論の前例のない卑俗化とようしやなく斗かわずには、自分の世界革命の目的を実施することはできない。」(レーニン)のだ。

2. プロレタリア階級独裁なくして、革命は勝利できない

カウツキーの第一の罪条は「プロレタリア独裁」の放棄である。

既に日本における修正主義、社会帝国主義の頭目、日本「共産」党が第十三回臨時大会において、マルクス・レーニン主義とプロレタリア階級独裁を公式に放棄し、「自由と民主主義」宣言を発し、更に、ソ連社会帝国主義とは相対的に対立しつつも、イタリア、スペイン、フランス等西欧共産党もプロ独を放棄し、白色共産党、愛国民主化している現在、我々はプロ独社会主義革命の旗を鮮明にし、「階級闘争を承認し、同時にプロレタリア独裁を承認するものだけがマルクス主義者である」(レーニン「国家と革命」)という原則をもって修正主義、社会帝国主義者を批判し打倒していかねばならない。

カウツキーはまず「独裁」の意味を分析する。それも階級ぬきにだ。すなわち独裁の文字通りの意味は単独の独裁者を意味するといふ全くのナンセンスをもって、階級の独裁というマルクスの言葉は文字通りの意味を持っていない。要するに「カウツキーに必要なことは、独裁を八支配の状態と解釈するこ

とである。なぜなら、こうすると革命的暴力が消えてなくなり、暴力革命が消えてなくなるからである。」すなわち、カウツキーはプロレタリア独裁の概念を「平和的に、すなわち民主主義的方法で」(カウツキー)獲得できるものと歪め、暴力革命を拒否し、「マルクスを平凡な自由主義者に変えてしまった」(レーニン)のだ。

我々はこうして「平和的で、民主主義的方法で」というカウツキー流の表現が日本「共産」党の「自由と民主主義宣言」に満ちあふれていることを知っているし、現代修正主義の基軸になっていることを暴露しなければならぬ。

他方、急進民主主義もまた、共産主義革命、プロレタリア階級独裁を、労働運動から切り離し、小ブルインテリゲンツィアの斗争によって実現しようとし、テロリズムとなる。更に、労働者階級の階級闘争を、プロレタリア階級独裁、共産主義革命から切り離し、経済闘争、民主主義的政治斗争にとどめ経済主義になる。急進民主主義もまたマルクス・レーニン主義と小ブルジョワの自由主義に転化せんとする路線なのである。我々はこうした経済主義、テロリズムの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得するために前進していかねばならない。

3. プロレタリア階級独裁は、ブルジョワ階級の復活を革命的暴力で抑えつける！

革命はブルジョワ階級の握っている国家権力を打倒し、労働者階級の権力を樹立し「収奪者が収奪される」プロ独社会主義を貫くことである。その攻防戦は文字通りの暴力革命として表現される。カウツキーはこの暴力革命を否定し革命的暴力を否定した。

カウツキーはプロレタリア階級独裁と暴力革命を否定するために「純粹民主主義」なる概念を持ち出してくる。しかし問題は「どの階級のための民主主義か」である。「搾取者は不可避的に国家を、被搾取者に対する自分の階級の、すなわち搾取者の支配の道具に転化させる。だから、多数者である被搾取者を支配する搾取者がいるかぎり、民主主義国家も不可避的に搾取者のための民主主義となるであろう。被搾取者の国家は、このような国家とは根本的に違ったものとならねばならない。それは、被搾取者のための民主主義でなければならぬし、搾取者を圧迫する手段でなければならぬ。ところが、一階級の圧迫は、この階級に対する不平等を意味し、その階級を八民主主義から除外することを意味する。」すなわち、ブルジョワ民主主義とプロレタリア民主主義は厳然たる差があり、搾取者と被搾取者の平等はありえないのである。「純粹民主主義」などは自由主義者のたわごと以外なものでもない。「ある階級が他の階級を搾取するあらゆる可能性が完全に絶滅されないかぎり、真の実際の平等はありえな

い」というのがマルクス主義の真理なのである。マルクスとエンゲルスはプロ独の必要性をこう説明している。「——ブルジョアジーの反抗を粉砕するため、——反動分子に恐怖を感じさせるため、——ブルジョアジーに向け武装人民の権威を維持するため、——プロレタリアートが自分の敵を暴力的に圧迫できるようにするためである」。「資本主義から共産主義に移行するこのひとつづきの時代が終らない間は搾取者には再興の望みが残されている」。文字どおりのプロ独継続革命である。レーニンは継続革命の問題を提起した後、こうカウツキーを批判している。「こういう事情であるのに、数百年、数千年の特権の有否の問題が歴史によって日程にのぼされる死にもぐりぬける、激しい戦争の時代に、多数者と少数者、純粹民主主義、独裁の不必要、搾取者と被搾取者の平等を説く!! なんとはいはかりしれない俗物根性か」

この暴力革命、継続革命は文字通り、ブルジョア階級独裁かプロレタリア階級独裁かという権力問題である。この観点を曖昧にし、「自民党政府打倒」を叫ぶ諸君は、国家の一部である政府を過大評価し、マルクスがバリコミンを総括して提起した「できあいの国家機構を粉砕する」という命題を曖昧にし否定するのである。議会主義の尻押しに陥っている彼らにはレーニンの次のカウツキー批判を提起しておこう。「カウツキーは、労働者階級の手で国家権力が移るのを全く拒否するか、それとも労働者階級が旧ブルジョワ機関を掌握することは認めるが、しかし労働者階級がこの国家機関を粉砕し、破壊し、それを新しいプロレタリア国家機関によっておきかえることを決して認めないかである。」

更に我々は、レーニンのプロ独継続革命を継承し斗っているのが毛沢東思想で武装された中国共産党であることを確認していかねばならない。それに対してロッキズムの一国社会主義不可能論、反対論を受けている反スタトロッキズムの諸君は、結局はカウツキーと同様のプロレタリア階級独裁の否定になつてくるのである。一国でプロレタリア階級独裁を樹立し、社会主義革命を開始し継続するのに反対するならば、革命は一切夢想になり小ブルジョワの「見果てぬ夢」に化してしまふであろう。

我々は既に、我々の内部に潜入していたカウツキーばりの自由主義者、背教者を摘発し放逐し、更に綱領草案を獲得した。我々はこの地平を踏まえ、プロレタリアートの階級性を放棄した現代修正主義、カウツキー主義者を摘発し打倒する重要な任務を持っていることを確認しなければならぬ。